

潤遺跡群 I

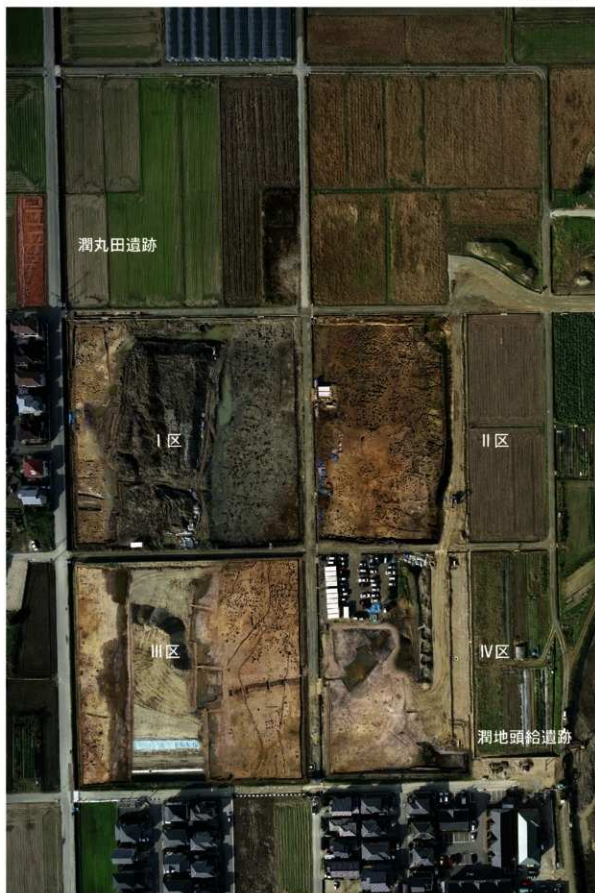
— 県道津和崎潤線拡幅に伴う潤丸田遺跡の調査 —

糸島市文化財調査報告書

第 4 集

2011

糸島市教育委員会



潤丸田遺跡と潤地頭給遺跡



a. 酒丸田遺跡全景



b. 酒丸田遺跡から南を望む

序

本書は県道津和崎潤線の拡幅に伴い、旧前原市教育委員会が平成21年度に発掘調査を実施し、整理は一市二町が合併して誕生した糸島市教育委員会で行った潤丸田遺跡の調査記録です。

潤丸田遺跡が所在する糸島市は3世紀の歴史書『魏志』倭人伝に登場する「伊都国」が存在したと考えられる場所で、古来より、中国・朝鮮半島との積極的な交流が展開され、当時の政治・経済・外交の拠点として、我が国の文化形成に重要な役割を果たしてきました。そのため、市内には弥生時代・古墳時代の遺跡を中心とした、国指定史跡7箇所をはじめとする数多くの貴重な文化財が点在しており、歴史と自然が息づく素晴らしい景観を含めて、その保護と活用が必要であり、開発による活気あるまちづくりとの調整が図られているところであります。





さて、本書に収められた潤丸田遺跡は県道津和崎潤線の拡幅に伴う発掘調査で確認された遺跡で、中世を主体とする遺構・遺物が確認されています。なかでも入江に向かって直線的に延びる舗装道路は特記すべき遺構で、中世の糸島の様相を解き明かす重要な情報を含んでいると考えられます。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました周辺住民の方々、ご指導とご助言を賜りました先生方、また、暑さや寒さを厭わず調査に参加された作業員みなさんに、心から感謝申し上げます。

平成23年3月31日

糸島市教育委員会
教育長 菊池俊秀

例 言

- 1 本書は糸島市潤字丸田にて実施される県道津和崎潤線の拡幅事業に伴い行った文化財調査報告書である。
- 2 本書に使用した遺構の実測は上に平尾和久・龍孝明が行い、井手麻友美・田中悠太（福岡大学学生）も一部行った。
- 3 現場における写真および出土遺物の撮影は上に平尾が行い、一部、龍孝明が行った。
- 4 現場における空中写真撮影は有限会社空中写真企画（代表 檀睦夫）に委託した。
- 5 本書に掲載した遺構図および全体図で使用した座標は国土座標系第2系を用いている。方位に関しては磁北で示している。
- 6 遺物の復元は、友池真由美・末益真奈美が行った。
- 7 遺物実測は平尾が行った。
- 8 製図は友池・末益が行った。また、遺物断面は、須恵器を  で示した。また、器表面の  は黒斑、 はコゲ、スス、 は丹塗りを示す。
- 9 本書の挿図中の遺物番号は写真図版の番号と統一している。なお、写真図版中の遺物は主なものを選択して掲載した。
- 10 本書に掲載した遺物や記録類は、順次、伊都国歴史博物館にて収蔵管理する予定である。
- 11 本書で報告する陶磁器の分類などは、先行研究に従っており、その出典は第3章IIの末尾に参考文献としてまとめて掲げる。
- 12 本書の校正は平尾と蔵田和美・内山久世が行った。
- 13 本書の編集・執筆は平尾が行った。

本文目次

第1章	はじめに	1
Ⅰ	調査の経過	1
Ⅱ	調査の組織	1
第2章	位置と環境	2
第3章	調査の記録	6
Ⅰ	潤丸田遺跡調査概要	6
Ⅱ	遺構と遺物	7
(1)	住居跡	7
(2)	土坑	10
(3)	舗装道路	15
(4)	溝	17
(5)	その他 包含層出土遺物	28
第4章	まとめ 舗装道路について	38
(1)	潤丸田遺跡舗装道路の時期的位置づけ	38
(2)	舗装道路の南北に想定される施設について	39
(3)	他地域の舗装道路との比較と分類	40
(4)	おわりに	45

挿図目次

第1図	糸島市の所在	2
第2図	糸島市内遺跡分布図	3
第3図	潤丸田遺跡周辺の遺跡分布図	4
第4図	潤丸田遺跡1号住居跡実測図 (1/60)	7
第5図	潤丸田遺跡1号住居跡出土土器実測図1 (1/3)	8
第6図	潤丸田遺跡1号住居跡出土土器実測図2 (1/3)	9
第7図	潤丸田遺跡土坑実測図1 (1/30)	11
第8図	潤丸田遺跡土坑実測図2 (1/30)	12
第9図	潤丸田遺跡土坑実測図3 (1/30)	13
第10図	潤丸田遺跡土坑・ピット出土土器実測図 (1/3)	14
第11図	潤丸田遺跡舗装道路、1・2、11～16号溝実測図 (1/100)	16
第12図	潤丸田遺跡舗装道路、1・2、11～16号溝土層断面図 (1/40)	18
第13図	潤丸田遺跡舗装道路出土土器実測図 (1/3)	19
第14図	潤丸田遺跡1・2号溝出土土器実測図 (1/3)	20
第15図	潤丸田遺跡2・11～14号溝出土土器実測図 (1/3)	21
第16図	潤丸田遺跡15・16・18・19号溝出土土器実測図 (1/3)	23
第17図	潤丸田遺跡3～9号溝実測図 (1/100)	24
第18図	潤丸田遺跡17～24号溝実測図 (1/100)	25
第19図	潤丸田遺跡溝出土石器、鉄器実測図 (1/3)	27
第20図	潤丸田遺跡包含層出土土器実測図1 (1/3)	29
第21図	潤丸田遺跡包含層出土土器実測図2 (1/3・1/4)	31
第22図	潤丸田遺跡包含層出土土器実測図3 (1/3)	33
第23図	潤丸田遺跡包含層出土土器実測図4 (1/3)	35
第24図	潤丸田遺跡包含層出土石器・鉄器・青銅器実測図 (1/3)	36
第25図	各地の舗装道路	41

付図 潤丸田遺跡全体図 (1/100)

図版目次

- 巻頭図版1 潤丸田遺跡と潤地頭給遺跡
巻頭図版2 a.潤丸田遺跡全景
 b.潤丸田遺跡から南を望む
図版1 a.潤丸田遺跡から可也山を望む。
 b.潤丸田遺跡から南を望む。
図版2 a.舗装道路全景
 b.調査区南側全景
図版3 a.1号住居跡全景
 b.1号住居跡土器出土状況
図版4 a.1号土坑全景
 b.3号土坑全景
 c.4号土坑土器出土状況
 d.9号土坑全景
 e.舗装道路舗装状況
 f.舗装断面
 g.舗装を除去した道路①
 h.舗装を除去した道路②
図版5 a.舗装道路と16号溝
 b.舗装道路と11・16号溝
 c.15号溝土層断面
 d.11号溝土層断面
 e.20号溝全景
 f.権出土状況
 g.舗装を除去した道路①
 h.舗装を除去した道路②
図版6 1号住居跡出土土器
図版7 1号住居跡・土坑・溝出土土器・陶磁器
図版8 溝出土陶磁器・瓦器・瓦質土器
図版9 溝出土陶磁器・瓦器・土師器
図版10 包含層出土陶質土器・須恵器・土師質土器
図版11 包含層出土陶器・陶磁器
図版12 包含層出土陶磁器
図版13 包含層出土陶磁器・朝鮮陶器
図版14 包含層出土陶器・溝出土権・石鏝
図版15 包含層出土石鏝、鉄器、銅銭

第1章 はじめに

I 調査の経緯

福岡県前原土木事務所所長近藤伸幸より文化財保護法94条に基づく埋蔵文化財発掘の通知が前原市（現糸島市）教育委員会に提出されたのは平成20年6月26日であった。それに基づき試掘調査を実施した。その結果、工事区間は長いものであったが遺構・遺物等が確認されたのは糸島市潤687、700番地に限られた。しかし、平成20年度の発掘調査地点はすでに決まっていたため、年度を改めて調査を行うことにした。発掘調査は平成21年6月1日より開始し、調査終了後から平成22年度にかけて、出土品の洗浄・接合ならびに実測・製図等を行い、平成23年3月31日に報告書を刊行した。

II 調査の組織

平成21年度に調査を実施した潤丸田遺跡の調査組織は以下のとおりである。

発掘調査（平成21年度；前原市・糸島市）及び整理・報告書作成業務（平成22年度；糸島市）

		平成21年度（前原市）	平成21年度（糸島市）	平成22年度
総括	教育長	中原一憲	中原一憲 菊池俊秀（H22.3～）	菊池俊秀
	教育部長	古川泰永	古川泰永	宗 哲夫
	文化課長	池田龍司	池田龍司	池田龍司
	文化課長補佐		洞龍二郎	洞龍二郎
	文化振興係長	平野弘志	洞龍二郎（兼任）	洞龍二郎
	発掘調査係長	角 浩行	角 浩行	角 浩行
	主幹		村上 敦	村上 敦
庶務	同 主査	犬丸智之	犬丸智之	犬丸智之
調査	同 主事	平尾和久	平尾和久	平尾和久
	同 臨時職員	龍 孝明		

発掘作業員

米山八重子・川上久美子・藤木和子・市丸千賀子・柏田睦子・和多治子・藤森啓子・末松繁光・杉山寛司・柴田敏一・中山健介・馬場義照・吉田弘・井手麻友美・田中悠太（福岡大学学生）

整理作業員

友池真由美・末益真奈美

本調査及び報告書の作成にあたっては、下記の方々から多くのご助言・ご支援を賜りました。記して感謝申し上げます（敬称略・順不同）

木村幾多郎・五十川雄也・中島恒次郎・西谷 正・小池史哲・吉田東明・下山正一・福岡裕爾・江藤武夫・木村忠夫・古川智次・上田健太郎・安楽 勉・赤澤徳明・吉村靖徳

第2章 位置と環境



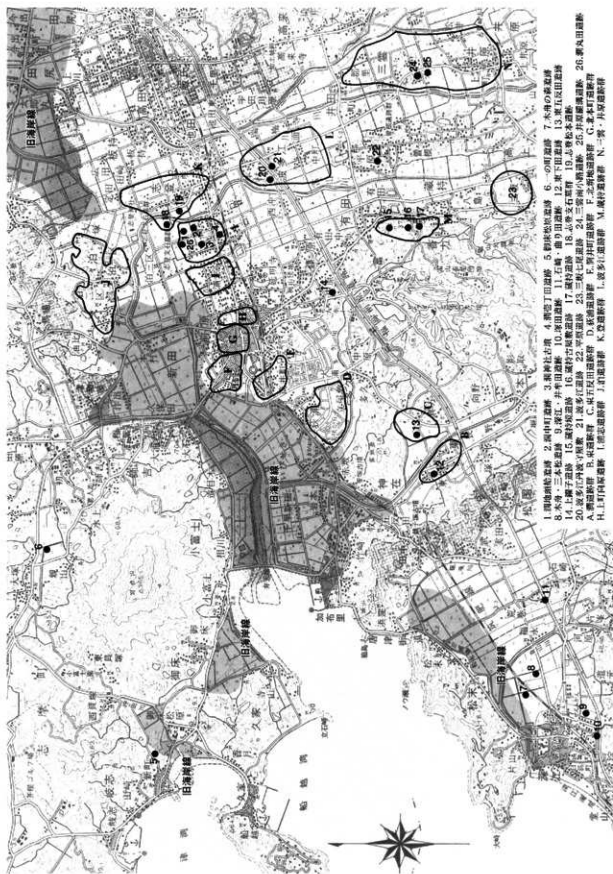
第1図 糸島市の所在地

ったことが潤地頭給遺跡など周辺遺跡の調査から明らかとなっている。なお、この低地帯は干拓以前、東の今津湾から西の加布里湾へ通じる海峡（糸島水道とよばれた）であったと考えられていたが、近年、下山正一氏が行った貝化石層の分布調査により、縄文時代後期以降において泊～志登の間は陸地として繋がるということが指摘されている。また、H野尚志氏は、中世末期までは加布里湾から入り込んだ潟状の内海が存在し、干拓地には新開北、新開南などの地名が残ると指摘する。ちなみに本調査の原因となった道路建設の計画に伴い、北側の泊地区から南の潤地区までトレンチを入れる形で事前の試掘調査を行ったが、遺跡が確認されたのは南端の潤丸田遺跡のみであり、それより北側では黒灰色粘質土の堆積がみられ、1mほど掘削すると、砂層が確認されとともに湧水が認められた。これらのことから、潤丸田遺跡は海浜部に面していることが明らかとなった。

後に詳述するが、潤丸田遺跡は中世を主とした遺跡であるため、本章では糸島地域でこれまで行われた中世の遺跡の調査を概観する。

潤地頭給遺跡は本遺跡と交差点を挟んだ南東側に位置する。調査面積は22,000㎡で、これまでに約半分の報告が行われた（Ⅲ・Ⅳ区）。遺構は弥生時代中期の甕棺墓群と弥生時代終末期～古墳時代前期の玉作り集落跡を主とするが、Ⅰ区とⅢ区の南北にはしる大きな谷の西側では中世の遺構が確認されている。Ⅰ区については現在整理中であるが、空中写真をみると東西方向に延びる大溝が2条あり、掘立柱建物も認められる。Ⅲ区では溝1条、掘立柱建物1棟、井戸8基が確認され、石鍋や播鉢、白磁碗、象嵌青磁、土釜などが出土している。出土品から遺構の時期は14世紀から16世紀に位置づけられる（江野編2006）。なお、平成21年度後半に調査を行った潤古屋敷遺跡は潤地頭給遺跡に西接しており、両者は一体のものとして評価する必要がある^{註1)}。

糸島地域では堀に囲まれた方形居館もしくは居館の堀と思われる溝が11例ほど確認されている。岡寺良氏は中世居館を①13世紀後半を中心とするもの。②14世紀代が中心で、15世紀後半へ継続しないもの。③16世紀代を中心とするもの。の3つに分類する（岡寺2009）。出土遺物



第2圖 青森市内遺跡分布圖

- 1. 遺跡跡地遺跡 2. 新中江遺跡 3. 新井田遺跡 4. 新田丁遺跡 5. 新田地区遺跡 6. 〇町遺跡 7. 本場の遺跡跡地
- 8. 本場・三本松遺跡 9. 新江・井田遺跡 10. 新田遺跡 11. 石橋・御9山遺跡 12. 東下田遺跡 13. 東五反田遺跡
- 14. 上陣子遺跡 15. 遺跡跡地遺跡 16. 遺跡跡地遺跡 17. 遺跡跡地遺跡 18. 小幸堂石塔群 19. 土橋遺跡跡地
- 20. 渡多内内渡子遺跡 21. 渡多江遺跡 22. 平野遺跡 23. 三坂七尾遺跡 24. 三坂南小橋遺跡 25. 井田遺跡跡地
- A. 新田遺跡跡地 B. 東田遺跡跡地 C. 東五反田遺跡跡地 D. 新井田遺跡跡地 E. 新井田遺跡跡地 F. 北新田遺跡跡地 G. 本本江遺跡跡地
- H. 上野町同慶遺跡跡地 I. 新田遺跡跡地 J. 新田遺跡跡地 K. 新田遺跡跡地 L. 渡多江遺跡跡地 M. 渡多江遺跡跡地 N. 新田遺跡跡地

の関係で時期不明の居館もあるが、岡寺分類①類に含まれるものは木舟の森遺跡（村上編1995）、木舟三本松遺跡（村上編1997）、石崎曲り田遺跡（古川編2001）、二丈中学校校内遺跡（古川編2009）、熊野神社東遺跡（古川編2009）がある。その中でも12世紀後半など古い時期に該当する事例が多い。岡寺分類②類には木藤丸遺跡（河合編2006）と蔵持古屋敷遺跡（瓜生編1993）が、岡寺分類③類には波多江丹波屋敷（橋口編1982）があり、糸島地域では岡寺①類に該当する古い段階の方形居館が多いことがわかる。しかし、溝の一部のみが確認される事例が多く、内部構造がわかるものはほとんどない。今後、明らかにされていくであろう中世山城との関連が注目される。その他、生活関連では先述した潤地頭給遺跡Ⅲ区で掘立柱建物と井戸8基、平成21年度後半に調査を実施した潤番田遺跡では井戸7基と区画溝が確認されている^{註2)}。

一方、中世の墳墓も数多く確認されている。市内では三雲・井原遺跡にひとつの核があり^{註3)}、堺地区で木棺墓1基、松井地区で土墳墓2基（川村他編1985）、宮ノ下地区で木棺墓1基（牟田編2003）などが確認され、いずれも龍泉窯系青磁椀や白磁椀、短刀などの鉄器類が認められる。その他、加布里湾沿岸部と深江平野地域、吉井地区中山間地域の3か所に核が認められる（古川2006）。その中でも、瀬崎・中牟田遺跡の木棺墓からは龍泉窯系青磁椀1、龍泉窯系青磁小皿1、同安窯系青磁小皿3、陶器水差の6点を副葬している（古川編2006）。このように6点以上の陶磁器を副葬する事例は非常に少ない。佐藤浩司氏は中世墓を副葬品の組合せから大きく7つに分類するが（佐藤2001）、糸島地域では陶磁器と土器を副葬するE1、F1タイプが多く、次に陶磁器と鉄器が共存するB4タイプが続く。そのほか、火葬土壇29基、土壇墓1基が確認され、土壇墓には象嵌青磁椀を副葬する上町木下遺跡（瓜生編1993）や陶磁器と銅銭（当十銭）を副葬する森田遺跡（村上編2000）など特異な例も存在する。また、木舟・三本松遺跡1号木棺墓からは白磁椀1、管状土鍾17、有溝石鍾6点が出土している。そのうち有溝石鍾は滑石製で石鍋の再加加工品である（村上編1997・夏木2008）。なお、糸島市内では潤古屋敷遺跡などで石鍋再加加工品が出土している。そのほか、近年、五輪塔などの石塔類の調査も行われだし、成果を上げつつある（山内2008、山内他2008、西野2008）。

また、糸島市内では5箇所の中世山城が確認されており、縄張図の作成・公開などが進められ（山崎1998）、個々の概要もまとめられている（古川2009）。また、原田氏の居城とされる高祖城跡では発掘調査が行われ、報告書も刊行されている（瓜生編2003）。

以上、糸島地域で行われた中世遺跡の調査成果を概観したが、墳墓に比べ、集落の様子が不鮮明であることや山城の調査がほとんど進んでいないことなど課題も多々あり、今後の調査・研究の進展が期待される。

【注】

- 1) 潤古原敷遺跡は平成23年度以降に報告予定。方形居館の堀が確認されている。
- 2) 潤番田遺跡は潤古屋敷遺跡の南側に位置する。象嵌青磁の陶枕など高麗・朝鮮青磁が比較的多く出土している。平成23年度以降に報告予定。
- 3) 三雲・井原遺跡について、以前は三雲（もしくは）井原+小字遺跡で表現していたが（例：三雲下西遺跡）、現在は三雲・井原遺跡+小字地区（例：三雲・井原遺跡下西地区）という表現で統一している。しかし、井原編遺跡のように学史上、両有名詞化しているものは、その限りではない。

【参考文献】

- 瓜生秀文編1993『前原地区遺跡群Ⅲ』前原市文化財調査報告書第45集
- 瓜生秀文編2003『高祖城』前原市文化財調査報告書第85集
- 江野道和編2006『潤地頭給遺跡Ⅰ』前原市文化財調査報告書第93集
- 岡寺 良2009「北部九州の方形城館について—筑前の事例を中心に—」『中世城郭研究』23
- 佐藤浩司2001「豊前地域における中世墳墓の副葬品」『中世土器研究論集—中世土器研究会20周年記念論集—』
- 佐藤 信1998「周防系瓦質土器の分布とその背景についての検討メモ」『七隈』35
- 夏木大吾2008「木舟・三本松遺跡木棺墓出土滑石製沈子の考察」『七隈史学』10
- 西野元勝2008「福岡県糸島郡二丈町千人塚の中近世石造物」『七隈史学』10
- 横門達也編1982『波多江遺跡』今宿ハイパス関係埋蔵文化財調査報告書第6 福岡県教育委員会
- 古川秀幸2006「糸島地域の中世木棺墓」古川秀幸編『瀬崎・中牟田遺跡』二丈町文化財調査報告書第35集
- 古川秀幸2009「二丈町の中世山城」菅さとみ編『宝珠岳城周辺遺跡』二丈町文化財調査報告書第45集
- 古川秀幸編2001『石崎曲り田遺跡』二丈町文化財調査報告書第27集
- 古川秀幸編2009『熊野神社東遺跡』二丈町文化財調査報告書第43集
- 古川秀幸編2009「二丈中学校校内遺跡」二丈町文化財調査報告書第44集
- 牟田華代子編2006『池田井田遺跡』前原市文化財調査報告書第91集
- 村上 敦編1995「木舟の森遺跡」二丈町文化財調査報告書第12集
- 村上 敦編1997「木舟三本松遺跡」二丈町文化財調査報告書第15集
- 山内亮平2008「糸島郡域における中世石塔の展開」『七隈史学』10
- 山内亮平2009「前原市金龍寺所在の中近世石造物について」『金龍寺開創五百年記念誌』
- 山内亮平・西野元勝・桃崎祐輔2008「福岡県糸島郡二丈町一貫山・前原市東地区の中近世石造物」『福岡大学考古資料集2』福岡大学考古学研究室調査報告書第7冊
- 山崎龍雄1998「糸島地方の中世山城採集資料について」『福岡市博物館研究紀要』8

第3章 調査の概要

I. 潤丸田遺跡調査概要

試掘調査の結果、糸島市潤687・700番地の発掘調査を実施した。調査面積は750㎡である。当地は水田で、耕作土のすぐ下で遺構面が確認された。重機を用いた表土剥ぎの際に行が多く出土したため、除去しようと考えたが、念のため石の表面のレベルで水平に表土を除去し、あとは人力で土の除去を行った。その結果、北部九州では事例が少ない中世の舗装道路の確認につながった。道路は南北に延び調査区内で約32m確認されたが、その端は調査区の外に延びており確認できていない。

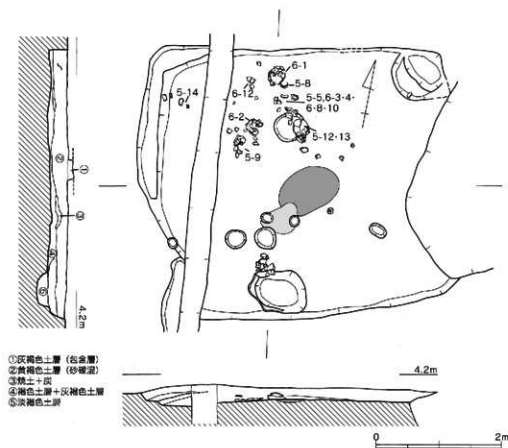
潤丸田遺跡では道路のほか、住居跡1棟、土坑、溝多数を確認している。以下、個別に遺構ならびに出土品を報告する。

II 遺構と遺物

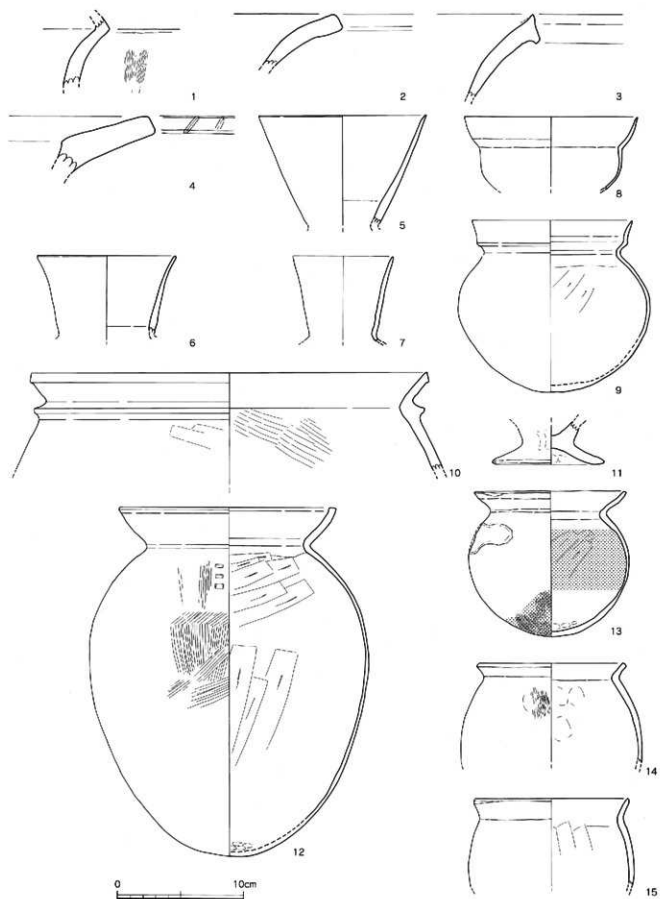
(1) 住居跡

1号住居跡 (第4図) 調査区の北側で確認された住居跡で、東西方向に長軸をもつ。南北4.26m、東西4.86m、深さ27cmを測り、東側の一部は21号溝に、西側は暗渠に切られる。住居跡中央部やや北寄りに直径50cmほどの炉があり、焼上と炭が詰まっていた。炉の深さは5cm程度である。炉の南側には焼上と炭が広がる部分がある。土器は炉の周りを中心に出土している。住居跡の南壁中央部と北東角には上坑がある。住居跡の北側8mは段落ちとなっている。

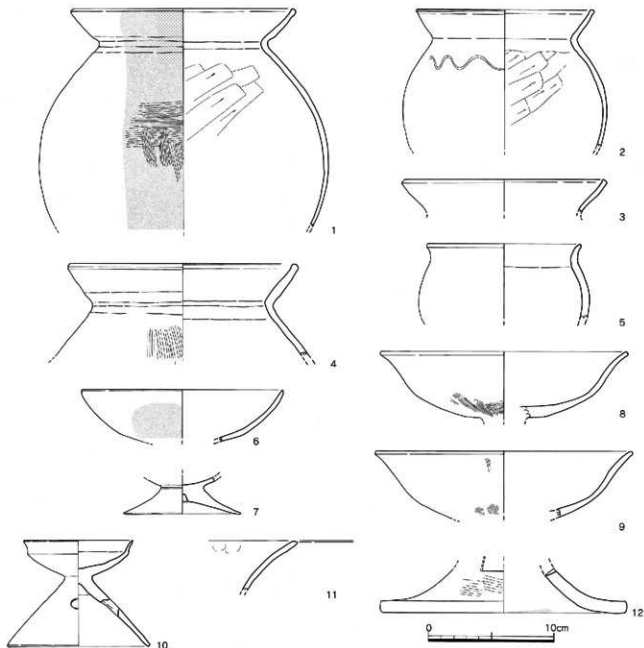
出土遺物 (第5・6図) 1号住居跡からは弥生時代中期から古墳時代前期までの土器を含むが、床面直上や炉付近からは古式土師器が集中して出土していることから、古墳時代前期の住居跡と判断される。第5図1は住居跡北側の壁際で出土した複合口縁壺片である。小片のため、径を復元できない。頸部にハケメを残す。2は住居跡やや西寄り中央部から出土した大型甕の口縁部である。端部を弱くつまみ上げる。3も甕の口縁部で、端部を上下につまみ出す。住居跡北側中央部出土。4は大型の広口壺の口縁部である。端部に刻目を施す。小片のため、傾きはやや不安がある。住居跡の北西側から出土。5は小型広口壺の口縁部である。本来は口縁部にヨコミガキが施されるが、剥離している。住居跡中央部炉跡付近出土である。6は小型二重口縁壺の口縁部である。剥離が著しく調整は不明である。住居跡北側中央部出土である。7は直口壺の口縁部であ



第4図 濁丸田遺跡1号住居跡実測図(1/60)



第5图 河丸田遺跡1号住居跡出土土器実測図1(1/3)



第6図 洞九田遺跡1号住居跡出土土器実測図2(1/3)

る。一部タテミガキが残るが、剥離部分が多い。住居跡中央部炉跡付近出土である。8は碗である。器壁は薄く、口縁部は丸みをもちつつ立ち上がる。内面頸部の稜はやや鋭い。9は小型の二重口縁壺である。一部欠損があるがほぼ完形の資料である。器表面は剥離しており、調整は不明。口縁反転部の稜はあまい。胴部中央に最大径がある。住居跡中央やや西寄りから出土。10は住居跡北西部から出土した大型碗。口縁端部は下につまみ出し、頸部には方形の突帯を巡らす。内面にハケメを残す。11は焼土の南から出土した脚部片である。脚部は二次焼成を受け淡橙色を呈する。12は布留甕である。口縁はやや内湾しつつ立ち上がり、端部をつまむ。内面上部はヨコヘラケズリ、下部は底から上へヘラケズリを施す。外面は肩部に方形棒状品の先端で押さえ、窪ませたものが縦方向に3個並ぶ。最大径は胴部上半にあり、外面はハケメを残す。底部は丸底である。炉跡の直上からの出土。13は小型の甕でほぼ完形に復元される。口縁部と肩部が大きく

剥離している。底部付近はハケメが残り、ススが付着する。内面はヘラケズリを施す。炉跡付近から出上る。14は小型の甕である。口縁が短く広がり、端部は方形である。住居跡西側壁際から出上。15は小型の甕である。頸部のしまりは弱く、やや肩が張る。第6図1は布留甕である。外面口縁部付近は赤色の化粧土を施す。その他の箇所には黒斑が残る。口縁部は弱く内湾しつつ立ち上がり、端部を内側に少し傾ける。胴部内面はヘラケズリ、外面はハケメを施す。2は小型の甕である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部をつまみ出す。胴部上半に波状文を施すが、器表面は剥離しており、調整はわからない。内面はヘラケズリを施す。炉跡西側から出上。3は布留甕の口縁部片。内湾しつつ立ち上がる。炉跡北側から出上。4は炉跡北側から出上した甕の上半部である。口縁部は肉厚で端部を内側につまみ出す。外面はハケメを残す。5は小型の甕である。頸部のしまりはなく、胴部は丸みを帯びる。

6は椀か。器壁は薄く、外面中央部に黒斑をもつ。炉跡北側出土。7は脚台部である。本来は脚台付椀か。脚裾部は若干内湾する。住居跡南東側出土である。

8は高坏の坏部である。反転部の稜はあまく、外面にはハケメを残す。口縁端部は丸くおさめる。炉跡北側出土である。9も高坏の坏部である。反転部の稜はあまく、口縁部はやや肉厚である。外面にはハケメを残す。炉跡直上出土である。

10は浅い坏部をもつ高坏である。器壁も薄く、丁寧に作られているが、器表面は剥離しており、調整は不明である。直線的に広がる脚部には丸い透かしを入れる。炉跡北側出土である。11は鼓形器台の口縁部片か。丁寧に作られているが、器表面は剥離している。小片のため、径は復元できない。12は器台である。脚裾端部は方形で、外面はヨコハケを施す。中部には方形透かしが入る。

(2) 土坑

1号土坑 (第7図1) 調査区南側に位置する直径0.75mのほぼ正円形の土坑で、深さ18cmを測る。床面近くから石が4点出土している。

2号土坑 (第7図2) 調査区の南端で確認された東西に長軸をもつ土坑で、東西1.32m、南北0.75m、深さ33cmを測る。出土遺物はない。

3号土坑 (第7図3) 調査区の南側に位置する東西0.48m、南北0.33mの隅丸方形の土坑である。深さは10cm程度で、床面から離れた状態で土器が出土している。

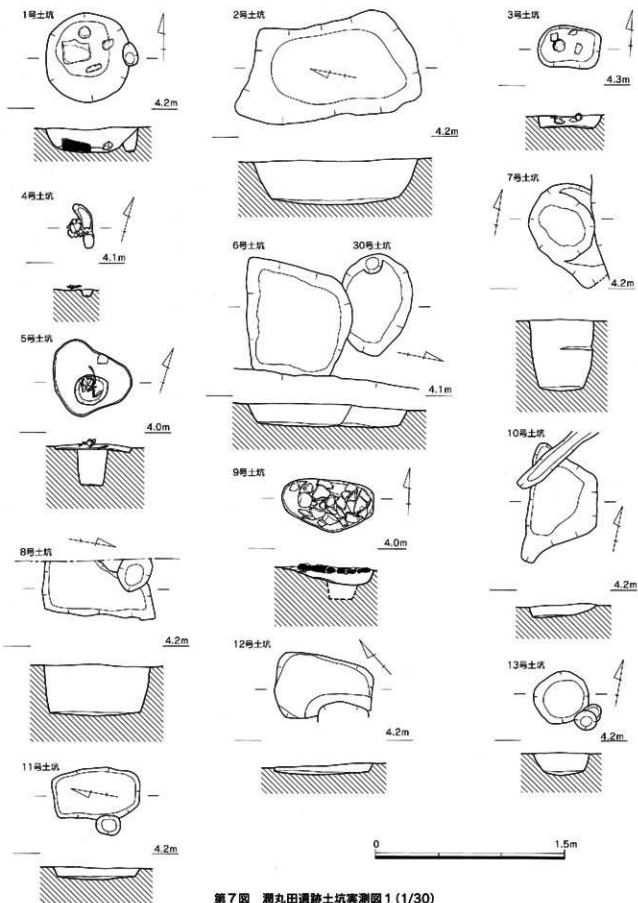
出土遺物 (第10図1・2) 1は土師器の高坏脚柱部である。器壁は薄く仕上げているが、外面は剥離して、調整不明である。2は小型の甕で、口縁部を欠く。外面はハケメ、内面はヘラケズリを施す。

4号土坑 (第7図4) 調査区の中央東寄りで確認された東西0.10m、南北0.38mの細長い土坑で黒色土器が出土している。

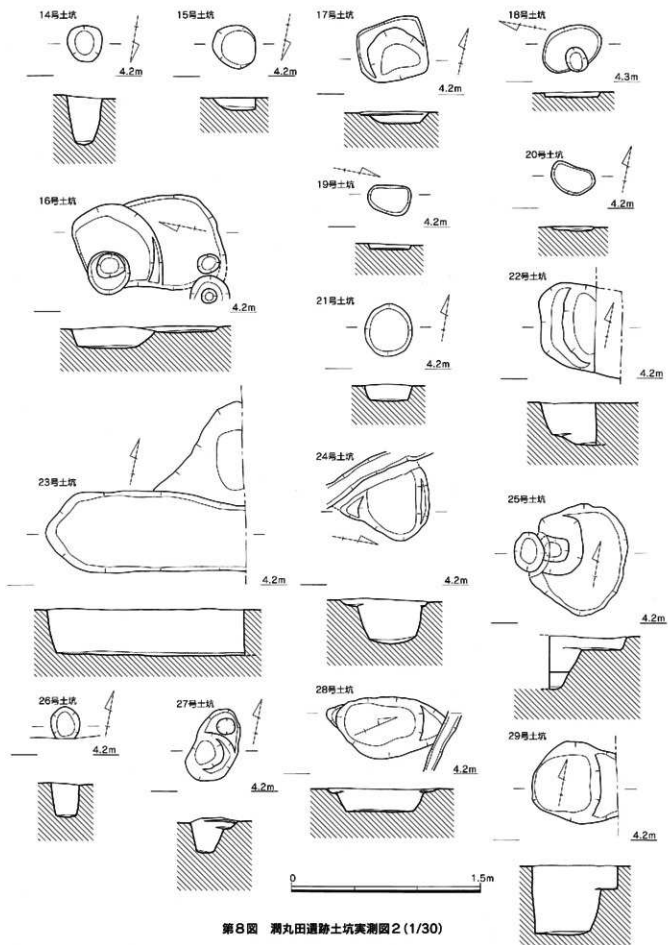
出土遺物 (第10図17) 17は黒色土器B類である。検出時はつぶれた形で出土したが、図上では完全形に復元される。口縁端部を弱く反転させる。

5号土坑 (第7図5) 調査区の中央部西側で確認された東西0.60m、南北0.62mの二段堀の土坑である。中心部は直径0.25m程度である。深さは33cmで、上層から土器が出土している。土坑からは弥生時代後期の甕の胴部が出土しているが、図化できなかった。

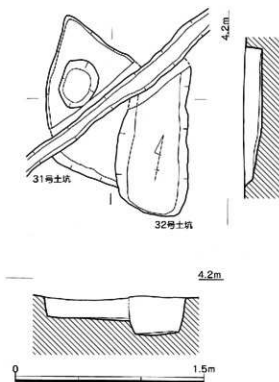
6号土坑 (第7図6) 調査区の北側で確認された東西0.84m、南北0.90mを測る方形の土坑で



第7图 洞丸田遺跡土坑実測圖1 (1/30)



第8图 渊丸田遺跡土坑実測圖2 (1/30)



第9図 彌丸田通助土坑実測図3(1/30)

出土遺物 (第10図3) 3は象嵌青磁碗の口縁部である。口縁部は丸くおさめ、象嵌部分は白色土を埋める。淡緑色の釉をかける。

11号土坑 (第7図11) 調査区の南側東端で確認された長方形の土坑で、東西0.42m、南北0.67m、深さ9cmを測る。出土遺物はない。

12号土坑 (第7図12) 調査区の南側で確認された隅丸方形の土坑で、東西0.78m、南北0.52m、深さ8cmを測る。出土遺物はない。

13号土坑 (第7図13) 調査区の南側で確認された直径0.45mの正円形の土坑で、深さ18cmを測る。

出土遺物 (第10図4) 4は弥生時代中期の壺の底部である。平底で、内外面ともに丹塗りを施す。

14号土坑 (第8図14) 調査区の南側で確認された直径0.30mのビット状の土坑である。深さは40cmある。出土遺物はない。

15号土坑 (第8図15) 調査区の南側、1号溝と2号溝の間で確認された直径0.35mのビット状の土坑である。深さは10cmである。

出土遺物 (第10図5) 5は弥生時代中期の甕の底部である。底部はやや上底である。外面にはハケメを施す。

16号土坑 (第8図16) 調査区の南側で確認された東西0.65m、南北0.66mの方形の土坑である。深さは18cmあり、土坑の左側はビットに切られる。

出土遺物 (第10図6) 弥生時代中期の壺の底部片である。平底であろう。内外面ともに剥離しており、調整は不明である。

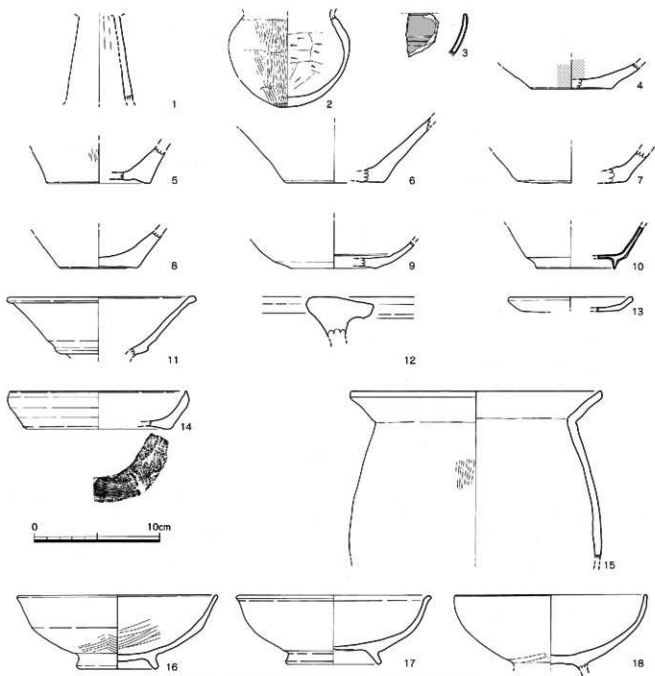
ある。深さは約20cmである。出土遺物はない。

7号土坑 (第7図7) 調査区の北側で確認された土坑で、東西0.51m+ α 、南北0.82m、深さ57cmを測る。東側を23号溝に切られる。出土遺物はない。

8号土坑 (第7図8) 西側が調査区外に延びる土坑で、東西0.45m+ α 、南北0.87m、深さ42cmを測る。北側をビットに切られる。出土遺物はない。

9号土坑 (第7図9) 調査区の北端で確認された土坑で、東西0.75m、南北0.42mを測る。土坑検出面では5~15cm程度の石材を平面的に並べる。出土遺物はない。

10号土坑 (第7図10) 調査区の南側で確認された土坑で、東西0.52m、南北0.97m、深さ10cmを測る。土坑の北西側は8号溝に切られる。



第10回 羽丸田遺跡土坑・ピット出土土器実測図(1/3)

17号土坑 (第8図17) 調査区の南側で確認された東西0.55m、南北0.50mの方形の土坑である。南側が一段深くなっており、深さ9cmを測る。出土遺物はない。

18号土坑 (第8図18) 調査区の南側で確認された東西0.36m、南北0.43mの楕円形土坑である。深さは5cm程度と浅い。西側をピットに切られる。出土遺物はない。

19号土坑 (第8図19) 調査区の南側で確認されたピット状の土坑で、東西0.24m、南北0.35m、深さ5cmを測る。

出土遺物 (第10図7) 弥生時代の壺の底部である。中心部分を欠くが、平底と思われる。

20号土坑 (第8図20) 調査区の南側で確認されたピット状の土坑で、東西0.36m、南北0.24m、深さ5cmを測る。

出土遺物 (第10図8) 弥生時代の壺の底部である。平底であるが、若干上底気味である。内面はナデを施すが、外面は剥離しており調整は不明である。

21号土坑 (第8図21) 調査区南側西端で確認されたピット状の上坑で2号溝を切る。直径0.38m、深さ15cmを測る。

出土遺物 (第10図9) 9は越州窯系青磁碗か。内外面ともにオリーブ色の釉薬が薄くかかる。内面見込み部分には段がつく。外面底部には露胎で、白色上の目地が1箇所残る。胎土は黄色みがかかった灰色で緻密である。

22号土坑 (第8図22) 調査区の中央部東端で確認された上坑で、東側が調査区外に延びる。東西0.65+ α m、南北0.69mを測る。東側が一段深くなっており、深さ35cmを測る。出土遺物はない。

23号土坑 (第8図23) 調査区の中央部東端で確認された土坑で、東側が調査区外に延びる。東西1.51+ α m、南北0.63m、深さ38cmを測る。

出土遺物 (第10図10) 10は青磁の鉢である。器壁は薄く、唇付を除く全面に淡緑色の釉が厚くかかる。高台断面は三角形である。内外面ともに貫入が多い。

24号土坑 (第8図24) 調査区南側東端で確認された土坑で、西側を9号溝に切られる。東西0.63+ α m、南北0.70mを測る。土坑の中心部は一段深くなっており、深さ36cmを測る。

出土遺物 (第10図11) 11は鼓形器台の上半部である。内外面ともに剥離し、稜はあまい。口縁端部は肥厚する。

25号土坑 (第8図25) 調査区の南側で確認された西側をピットに切られる円形の土坑である。東西0.75m、南北0.89mを測る。土坑の西側が一段深くなっており、深さ43cmを測る。

出土遺物 (第10図12) 12は甕棺の口縁部の小片である。流れ込みか。

26号土坑 (第8図26) 調査区の北側西端で確認された直径0.22mのピット状の土坑である。深さは27cmを測る。土坑の南側は調査区外に延びる。

27号土坑 (第8図27) 調査区の北側西端で確認された東西0.35m、南北0.63mの楕円形の土坑である。南側は一段深くなっており、深さ35cmを測る。

出土遺物 (第10図13) 13は土師皿の小片である。裏面は剥離しており、切り離しの状況は不明。直径10cmに復元される。

28号土坑 (第8図28) 調査区の南側で確認された土坑で、北側を9号溝に切られる。東西0.50m、南北0.90+ α mを測る。深さは18cmを測る。

29号土坑 (第8図29) 調査区の中央部東端で確認された土坑で、東側は調査区外に延びる。東西0.69+ α m、南北0.61mを測る。土坑の西側は一段下がっており、深さ0.55mを測る。

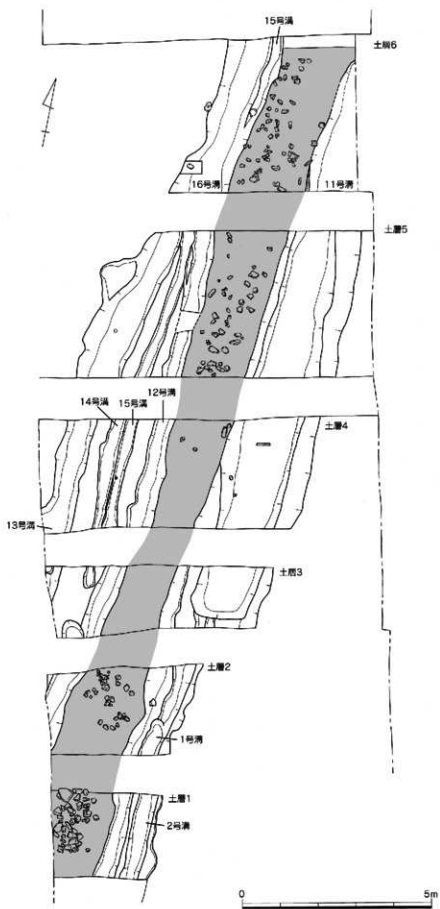
30号土坑 (第8図30) 調査区の北側で確認された土坑で、南側を6号土坑に切られる。東西0.82m、南北0.58mを測る。深さは16cmを測る。

31号土坑 (第9図31) 調査区の南側で確認された土坑で、東側を32号土坑に切られ、中央部を8号溝に切られる。東西0.67+ α m、南北1.09m、深さ15cmを測る。

32号土坑 (第9図32) 調査区の南側で確認された長方形の土坑で、31号土坑を切り、8号溝に切られる。東西0.54m、南北1.08+ α m、深さ35cmを測る。

(3) 舗装道路 (第11・12図)

舗装道路は調査区の南西部から北東部へ直線的に延びている。調査区内で全長約32m、幅1.5~2.0mを測る。長軸はほぼ南北方向にあるといえる。



第11图 洞丸田遺跡舗装道路、1・2、11~16号溝実測図(1/100)

上層断面を確認すると、調査当初、舗装道路の側溝と考えていた溝に舗装が一部かぶっていることが確認された。したがって、第12図の上層断面図2や5にあるように、舗装道路の両脇には側溝とはよべないような浅い窪み状の溝が続いていると判断した。しかし、溝は舗装道路に沿って延びていることから、本来同じ場所に道路が存在し、側溝が埋没した時点で、一度掘削し舗装を施したと考えられる。まず、地山を整形して道路となる平坦面と両脇の側溝を設ける（1期道路）。本来はこの上に何らかの舗装が施された可能性もあるが、現段階では不明である。その後、溝が埋没した段階で上から掘削し、道路を整備したものと判断される（2期道路）。

舗装は、拳大から人頭大の河原石をまばらに並べ、そのあとに個々の石の隙間に砂利を充填している。また、道路部分の土層断面を観察すると舗装部分の端を厚くし、舗装の強化を図っている。このような工法は横槽田遺跡（長崎県松浦市）の舗装道路などでも共通してみられるものである。なお、石の間に砂や砂利を充填する工法を用いることで、道路の硬度を長期間保つことが可能になるようで、調査時に舗装を剥く作業にかなりの時間を費やし、作業員の道具の先先が丸くなってしまったほどである。

また、舗装材として河原石のほかには瓦片や鉄滓も用いられていた。周辺の廃材を舗装材に転用するのは、博多遺跡（福岡市）の舗装道路でもみられる一般的なことである。

舗装道路の時期は、出土遺物から15～16世紀に位置づけられる。

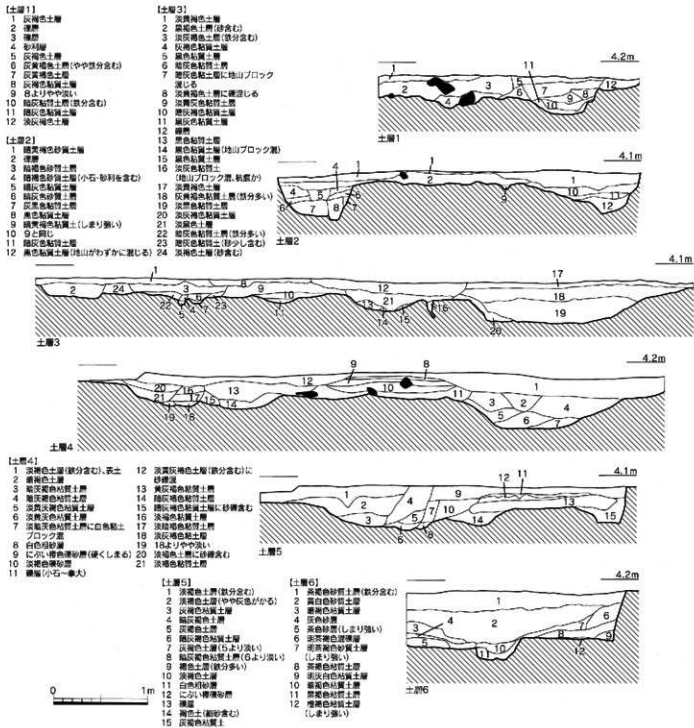
出土遺物（第13図1～10、第19図16～22）1は瓦器碗の口縁部である。器壁は薄く、口縁端部が若干肥厚する。断面は黒色、内外面ともに白灰色を呈する。2は瓦質土器の深鉢である。直口縁で外面に二条の突帯を巡らす。突帯の間には梅花文のスタンプを押す。内外面ともに暗灰色を呈する。なお、この深鉢は佐藤分類のD類に該当する（佐藤2006）。3は須恵器の底部である。瓶か。外面に回転ヘラケズリを、内面にヨコナデを施す。底部はやや上底気味の平底である。4・5は黒色土器A類碗の底部片である。4はやや外開きに、5はやや内開きに高台がつく。6は白磁碗である。内面見込み部分は軸を掻き取っている。外面には軸が及ばず、回転ヘラケズリの痕がよく残る。7～9は青磁碗の底部片である。7は黄味を帯びた緑釉を薄くかけるが、外面では確認できなかった。高台断面は方形で、底部は薄く仕上げる。8は淡い緑釉が薄くかかる碗で、高台畳付の一部まで軸が及ぶ。高台の断面は方形で、内面の削りは浅い。整形もやや粗い。9はくすんだ緑釉が厚くかかる碗で、外面は高台まで及ぶ。畳付から内側は無釉である。高台内面の削りは浅く、底部は肉厚である。10は須恵質の土器で、内外面に白色系の化粧土がかかる。内面見込には目地が残る。

第19図16～22は鉄滓である。18と20は碗形滓で、21は伊壁に鉄分が付いたものか。22は鉄分が多く残る。

（4） 溝

1号溝（第11図）調査区の南側で確認された溝で、舗装道路に切られ、2号溝を切る。幅0.50m、深さ20cmを測る。断面は逆台形を呈する。

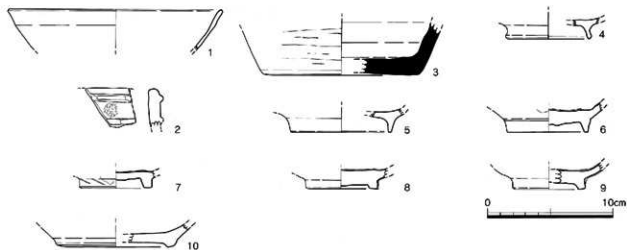
出土遺物（第14図1～10、第19図1・2・10）1は土鍋の上半部である。口縁端部は外に傾く。整形は雑で、指オサエの痕を残す。内面は斜めのハケメを施す。なお、外面にはススが附着する。2は須恵器系捏鉢の底部片で、濃灰色を呈する。内外面ともにナデを施す。特に底部は強いナデを施すが、凹凸が目立つ。3は瓦質の播鉢底部片で白灰色を呈する。外面はハケメの後にヨコナ



第12図 洞丸田遺跡舗装道路、1・2、11~16号溝土層断面図(1/40)

デを施す。最下段はヨコヘラケズリで調整する。内面は横方向のハケメの後に挿目を入れる。挿目は4本一単位となっており、上部は黒灰色を呈する。底径は16.2cmに復元されるが、すこし大きいかもしれない。4も陶質の挿目の底部片でえんじ色を呈する。底部裏面を含む外面はヘラケズリを施す。内面は6本一単位の挿目を入れる。

5は土師器の坏である。不安定な底部から緩く立ち上がり、口縁端部はつまんで外反させる。内面見込みには黒斑を有する。6は土師皿である。内外面ともに剥離しており、調整は不明。口径は8.6cmに復元される。7は須恵器の高台付坏である。平らな底部に断面方形の高台が垂直につく。口縁は底部から緩く広がり、端部の調整はややあまい。内面見込みには不定方向のナデを施す。淡青灰色を呈する。



第13図 洞丸田遺跡舗装道路出土土器実測図(1/3)

8は白磁の底部片である。外面は高台の付根まで軸が及ぶ。底部裏面は手持ちヘラケズリを施し、比較的薄く仕上げるが、形態は不安定である。内面は見込の軸を環状に掻き取るが、正円にはならないようである。また、軸の掻き取りにより、露胎した部分は日跡のようなものが残る。軸はやや緑味を帯びている。断面は白灰色を呈する。9は白磁の皿である。底部を除く全面に厚く軸が施される。軸はやや緑味を帯びた白釉である。内面見込みには花と葉を線でご表現するが、線に勢いがいことからスタンプ文であると思われる。花は牡丹か。10は同安溪系の皿である。底部は半分、口縁部はわずかに残る。外面は無文、内面は櫛描で乙字状の割花文を四隅に配置したのち、片刃彫で花卉を表現する。内外面ともに透明度が高い薄緑色の軸がかかる。底部付近は露胎で回転ヘラケズリ痕をよく残す。胎土は黄灰色で緻密である。

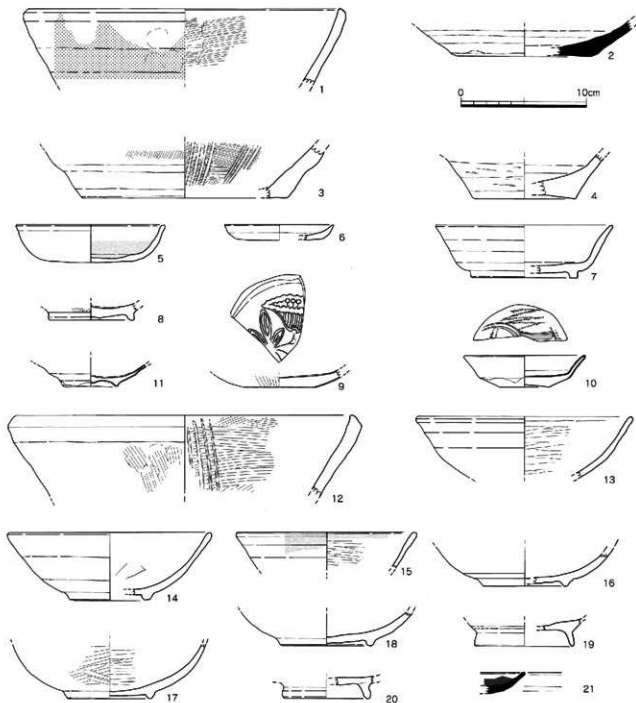
11は朝鮮雑釉陶器である。器壁は薄く仕上げ、底部裏面を削り込むことで高台状にしている。底部付近5か所に砂目地を残す。軸は青味を帯びた灰軸で、底部裏面にまで薄く施される。

第19図1・2は石鍋片である。1は口縁部付近の破片である。口縁部は確認できていない。鈎が厚いが、左側で途切れていることから、耳付石鍋の可能性もある。側面に加工痕はない。2は鈎付石鍋の口縁部の破片で、上端部は口縁が残る。鈎の下部にはススが附着している。下部の割口にはケズリ痕があり、再加工の途上品と思われる。10は鉄滓である。1号溝と2号溝が重なるところから出土しているため、どちらに伴うか判断できなかったものであるが、ここで報告しておく。

2号溝 (第11図) 調査区の南側から北東側に延びる溝で、1号溝と舗装道路に切られる。なお、2号溝は舗装道路の舗装の下に続いていた。幅0.55m、深さ30cmを測る。断面は逆台形から隅丸の三角形を呈する。

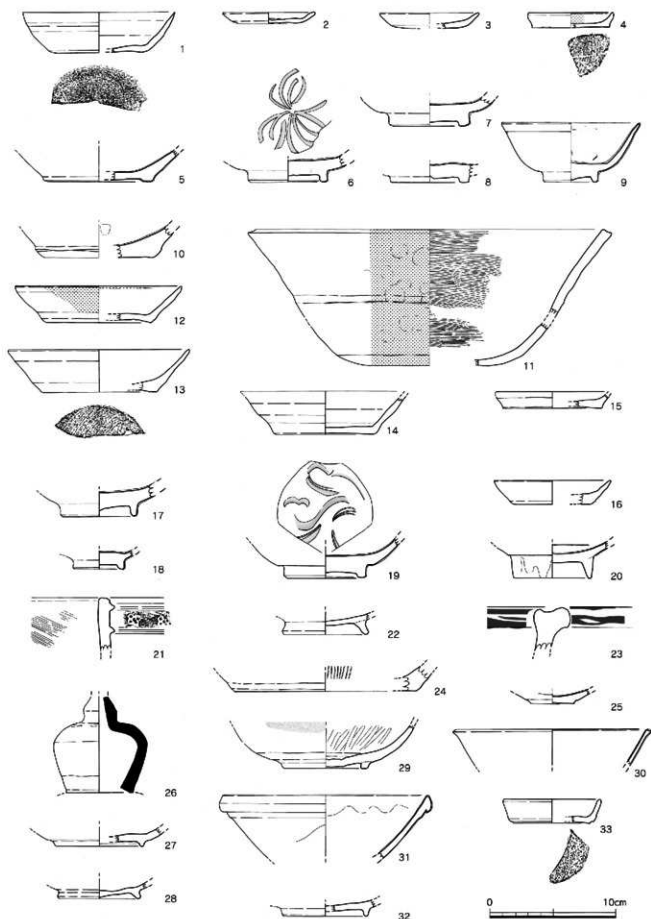
出土遺物 (第14図12~21、第15図1~10、第19図3~5、11~13) 12は土師質の播鉢上半部である。外面はタテハケとユビオサエ、内面はヨコハケの後に播目を入れる。播目は4本確認できるが、ちょうど割口にあたり詳細は不明である。外面は橙色、内面は淡橙色を呈する。

13~19は瓦器椀である。13は瓦器椀の上半部で底部を欠く。口縁部はやや外反する。内面はヨコヘラミガキである。14は瓦器椀片であるが、高台まで残り全容がわかる。高台はやや厚めのもので、器壁も全体的に厚い。口縁部は肥厚させつつ丸くおさめる。外面は橙味を帯びた灰色、内面は暗灰色からこげ茶色を呈する。内面口縁部には炭化物らしきものが附着する。15は



第14図 潤丸田遺跡1・2号溝出土土器実測図(1/3)

口縁部の小片である。器壁は薄いが、口縁端部は肥厚する。口縁端部付近は黒色化している。調整は丁寧である。16は瓦器椀の底部片である。高台断面は三角形である。内外面ともに剥離しており調整は不明である。高台内側のみ黒灰色で、そのほかは橙灰色を呈する。断面は黒灰色である。17は瓦器椀の下半部である。高台は断面台形で、つくりは丁寧である。内外面ともにヨコヘラミガキを施す。灰色を呈する。18も瓦器椀の下半部である。内外面ともに剥離が著しく、調整は不明である。高台のつくりは雑で断面方形である。外面は白灰色、内面は黒色を呈する。19は2号溝の舗装道路の下に潜る部分から出土した土師器椀である。やや長脚の高台をもつ。



第15图 羽丸田遺跡2・11~14号清出土土器実測図(1/3)

20は黒色上器B類の高台部である。高台の内側底部には板状圧痕を残す。高台端部は丸くおさめる。21は須恵器の坏蓋を反転させたもの。焼成はあまく、内面には疎らしきものが付着する。

第15図1は上師器の坏である。1/4ほど残存する。口縁端部は非常に薄く仕上げられる。底部は回転糸切りである。外面は淡橙色、内面は橙色を呈する。2～4は上師皿である。2は器壁を薄く仕上げられる上師皿である。全体的に磨滅しており調整は不明であるが、底部はへら切りのようである。白橙色を呈する。3は2号溝の舗装道路下の部分から出土した上師皿である。底部はへら切りで、口縁端部は丸くおさめる。4は復元口径6.7cmの小型の上師皿である。底部は糸切りで、口縁部に向かって急に立ち上がる。内面には朱色の顔料を塗布する。

5は舗装道路下に潜る部分の2号溝から出土した越州窯系青磁椀底部片である。胎土は淡赤紫で、オリーブ色の釉を薄くかける。釉薬は全面に及び、畳付には白色土の日地が2箇所残る。小高台内面の割りは浅い。

6～9は龍泉窯系青磁椀である。6は底部である。内面見込みには片切形で花卉を表している。釉は高台部までで、畳付から高台内面には釉が及ばない。高台の断面は方形である。7は椀の底部片である。全体的に肉厚である。特に高台部内面の割りは浅く、底部は肉厚である。高台の断面は方形である。胎土は灰色で緻密である。釉は淡緑色で高台畳付まで厚くかかる。8も底部片である。欠落部分が見込みまで及ぶ。胎土は灰色で緻密である。釉は淡緑色で、一部畳付まで及ぶが、高台内面には認められない。また、高台畳付には白色土の日地が1箇所残る。高台内面の割りは浅く、底部は肉厚である。9は青磁の小椀である。胎土は白灰色で、ゴマ塩状に粒が入るが、緻密で焼きもよい。釉は淡青緑で、一部高台畳付まで厚くかかる。高台内面の割りは浅く、底部は肉厚である。口縁部付近内外面に片切形で線を表す。龍泉窯系青磁小椀1-4a類か。

10は青磁か。内面には薄く淡緑色の釉がかかり、見込み部分には白色土の日地が残る。底部の調整は粗く、陶器のような焼きとなっている。

第19図3は鈔付石鍋の口縁部片である。口縁端部はそのまま残っている。ただ、鈔には横方向のケズリが入っている。4は石鍋の下半部片である。上部断面には研磨痕が残る。5は滑行で全ての面に研磨を施す。また、左側面と正面に挟りを入れる。滑行ではあるが、肉厚であり石鍋転用品ではないと思われる。11～13は鉄滓である。11は15.79g、12は51.60g、13は58.35gである。

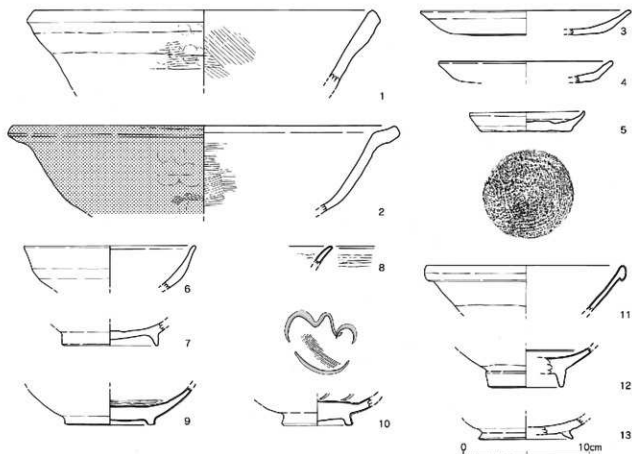
3号溝 (第17図) 調査区の南側で確認された溝で、南から北に延びる。幅は0.35～0.85m、深さは11cmを測る。断面は逆台形である。7号溝と9号溝に切られる。出土遺物はない。

4号溝 (第17図) 調査区の南端で確認された溝で、2・3号溝を切る。幅は0.40m、深さ3・4cm程度を測る。埋土の印象から新しい溝と思われる。出土遺物はない。

5号溝 (第17図) 調査区の南端で確認された溝で、3号溝を切り東西に延びる。幅0.25m、深さ7cm程度を測る。埋土の感じから新しい溝と思われる。出土遺物はない。

6号溝 (第17図) 調査区の南側で確認された溝で、7号溝に切られる。幅0.27m、深さ5cmを測る。出土遺物はない。

7号溝 (第17図) 調査区の南側で確認された溝で、南西から北西に延びる。3・6号溝を切るが9号溝に切られる。また、8号溝と並行して延びる。幅0.12m、深さ5cmを測る。埋土の色調・しまり具合から新しい溝と思われる。出土遺物はない。



第16図 溝丸田遺跡15・16号溝出土土器実測図(1/3)

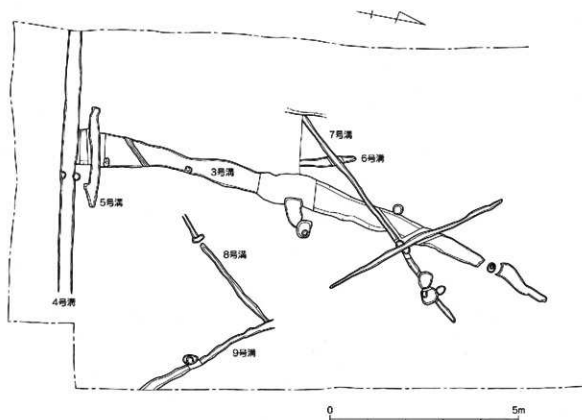
8号溝 (第17図) 調査区の南側で確認された溝で、一部途切れるものの南西から北西に延びる。3号溝を切るが9号溝に切られる。また、7号溝と並行している。幅0.17m、深さ7cmを測る。埋土の色調・しまり具合から新しい溝と思われる。出土遺物はない。

9号溝 (第17図) 調査区の南側で確認された溝で南東から北西に延びる。3・7・8号溝を切る。形態的には7・8号溝と同じものである。幅0.20m、深さ5cmを測る。埋土の感じから新しい溝と思われる。出土遺物はない。

10号溝 当初、溝と考えたが暗渠であることがわかり、欠番とした。

11号溝 (第11図) 調査区の中央部で確認された幅広な溝で、舗装道路の東に位置する。1号溝を切るが、断面の観察により道路の舗装は11号溝の埋没後に施されたことがわかる。幅2.00m、深さ60cmを測る。断面は逆台形である。

出土遺物 (第15図11～23) 11は土鍋である。口縁部と底部は接合しないが色調などから同一個体と思われる。底部は平底で、口縁部に向かってやや内湾しつつ広がりが立ち上がる。口縁端部はヨコナデでくまさせる。内面はヨコハケ、外面はオサエとナデを施す。外面はスガが付着し黒色化する。12は土師器の坏である。底部はヘラ切りであるが、粗く施されたため、底部の凹凸が激しい。口径は13.2cmに復元される。内面口縁端部にはスガが付着し、外面も一部黒色化する。13も土師器坏である。胎土に金雲母と角閃石を含む。口縁部は比較的直線的に立ち上がり、底部は糸切りである。14は口縁端部を欠く土師器坏である。胎土に赤褐粒を多く含む。底部はヘラ切りで丁寧調整する。15は口縁端部を欠く土師皿である。底部は糸切りである。



第17図 濁丸田遺跡3～9号溝実測図(1/100)

16も土師皿であるが、底部が厚い。全体的に剥離が著しく調整不明である。

17～19は龍泉窯系青磁碗である。17は碗の底部である。全体的に磨滅している。胎土は淡青灰色で、鈍い緑色の釉を厚くかける。釉は高台内面までかかるが、底部には認められない。高台内面の削りは深い、底部は肉厚である。18も底部であるが、高台の径が小さく小碗の可能性もある。オリーブ色の釉は透明度が高く、厚くかかるが、畳付より内側には及ばない。胎土は灰色で緻密である。19は碗の底部で、見込みに片切形で花文を表す。釉は厚くかかるが、畳付より内側には及ばない。高台内面の削りは浅く、底部は肉厚である。

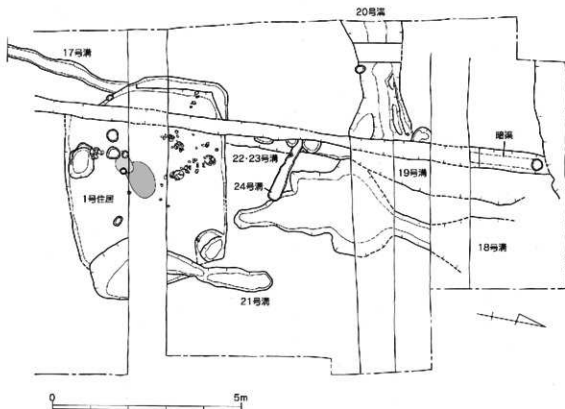
20は白磁碗である。内面見込み部分に段を設ける。釉はやや緑味を帯びた白釉で、外面は碗の下部までかかる。外面は回転ヘラケズリの痕をよく残す。高台内面の削りは深く、底部は薄い。白磁碗V類か。

21は瓦質土器の深鉢形火鉢である。直口縁で口縁下に二条の突帯が巡る。突帯の間にはスタンプで梅花文を施す。内面は斜ハケメが残る。内外面ともに黒灰色、断面は濃灰色を呈する。佐藤分類D類である(佐藤2006)。

22は黒色土器B類の碗底部である。内外面ともに剥離が著しく調整は不明である。

23は陶器片である。小片のため、復元していないが、本来の口径は大きなものであると思われる。口縁上部はくぼみ、端部は丸く仕上げる。

12号溝(第11図)調査区の南西から北東に延びる溝で、舗装道路と16号溝に切られる。幅0.65m、深さ11cmを測る。断面は浅い碗状を呈する。



第18図 瀬丸田遺跡17～24号溝実測図(1/100)

出土遺物 (第15図24・25) 24は土師質の播鉢の底部である。小片から復元しているため、径はやや不安がある。播日の幅は広く、4本で一単位である。胎土は金雲母を含み、橙色を呈する。

25は陶器片である。内面には黄緑色の釉が薄くかかる。外面には釉が認められない。底部はやや上底である。胎土は緻密で灰色を呈する。

13号溝 (第11図) 調査区の南西から北東に延びる溝で、舗装道路の内側に位置する。土層観察用のベルトに分断されているが、16号溝に続くと思われる。14号溝と舗装道路を切る。幅0.65～1.50m、深さ26cmを測る。断面は逆台形である。

出土遺物 (第15図26～31) 26は須恵器である。器表面には灰釉がかかる。また、肩部には重ね焼きの痕跡が残る。底部から直線的に立ち上がり、肩部から急にすぼまる。頸部から再び膨らみつつ立ち上がり口縁部にいたる。口縁部は欠けており、直径6mm程度の孔が確認される。底部は欠けているが、別個体に貼り付けていたと思われる。27は須恵器杯の底部片である。青灰色を呈し、高台端部は内側に折り曲げる。全体的に磨滅している。28は黒色土器B類の椀底部片である。器壁は薄く仕上げ、高台は外に広がる。断面は暗灰色を呈する。29は瓦器椀である。内外面ともにヘラミガキを施す。高台はやや内向きに付けられ、底部は回転ヘラケズリを施す。内外面ともに灰色を呈し、外面の一部黒斑をもつ。

30・31は白磁椀である。30は端部を若干外反させるもので、椀部が若干内湾する。全体に黄味がかった白釉をかける。白磁Ⅶ-3類か。31は玉縁口縁の白磁椀である。比較的厚く白釉がかかるが、外面は比較的上位でおわる。外面は回転ヘラケズリの痕がよく残るが、器壁は厚い。

14号溝 (第11図) 調査区の南西から北西に延びる細い溝である。舗装道路の西に位置し、13・14号溝に切られる。幅0.22～0.55m、深さ10cm程度を測る。断面は逆台形である。

出土遺物 (第15図32・33) 32は黒色土器B類である。底部の小片で、内面の剝離が著しい。33は上師皿である。口径の割に器高があるもので、底部は糸切りである。

15号溝 (第11図) 調査区の南西から北西に延びる細い溝である。13 (16) 号溝、14号溝、舗装道路に切られる。途中、13 (16) 号溝に切られ断絶するが、北側では舗装の下で確認される。幅0.35m、深さ16cmを測る。

出土遺物 (第16図1、第19図14) 1は瓦質の捏鉢。小片のため挿目は確認できなかった。口縁端部はややくぼむ方形である。内面は斜め方向にハケメを施すが、口縁部付近は剝離が著しい。外面はオサエとヨコハケメが残る。白灰色を呈する。第19図14は鉄滓である。鉄分は弱く、重さ142.57gである。

16号溝 (第11図) 調査区の中央部から北部で確認された溝である。南から延びてくる13号溝と同一のものと思われる。なお、遺物は別々に取り上げているので、別に記述する。

出土遺物 (第16図2～12、第19図7・9・15) 2は土師質の鍋である。外面は全面スに覆われ、オサエとハケメを残す。内面はヨコハケメを施す。口縁部は外反し、肥厚する。内面は淡灰黄褐色を呈する。3は土師器の坏である。白灰色を呈し、口縁部は若干外反する。4も土師器の坏である。淡橙色を呈し、若干肉厚である。5は土師皿である。底部は肉厚であるが、口縁部の器壁は薄い。底部は糸切りである。6は土師器の椀である。灰白色を呈し、口縁部付近は薄く仕上げる。7は土師器の椀底部である。直線的な高台部をもち、器壁を薄く仕上げる。8は陶器の口縁部である。灰色の胎土に白土をかけ、その上に透明釉をかける。粉青沙器か。

9は青磁の椀である。青灰色の胎土の上に青緑色の釉をかける。外面は高台内面側までかかるが、底部は浅い削りが入る。全体的に器壁は厚く、特に底部は肉厚である。10も青磁椀底部片である。見込みには柳描文と片切彫で花文を表す。釉薬は厚くかかるが、畳より内側にはかからない。高台内面の削りは浅く、底部は肉厚である。

11は玉縁口縁の白磁椀である。内外面ともに白釉がかかるが、外面下部には及ばない。白磁椀IV類である。12は白磁椀の底部である。内外面に緑味の白釉をかけるが、外面の高台付近には及ばない。高台は丁寧な回転ヘラケズリを施す。高台内面は深い削りを入れ、底部を薄く仕上げる。内面見込み部分に段をもつ。

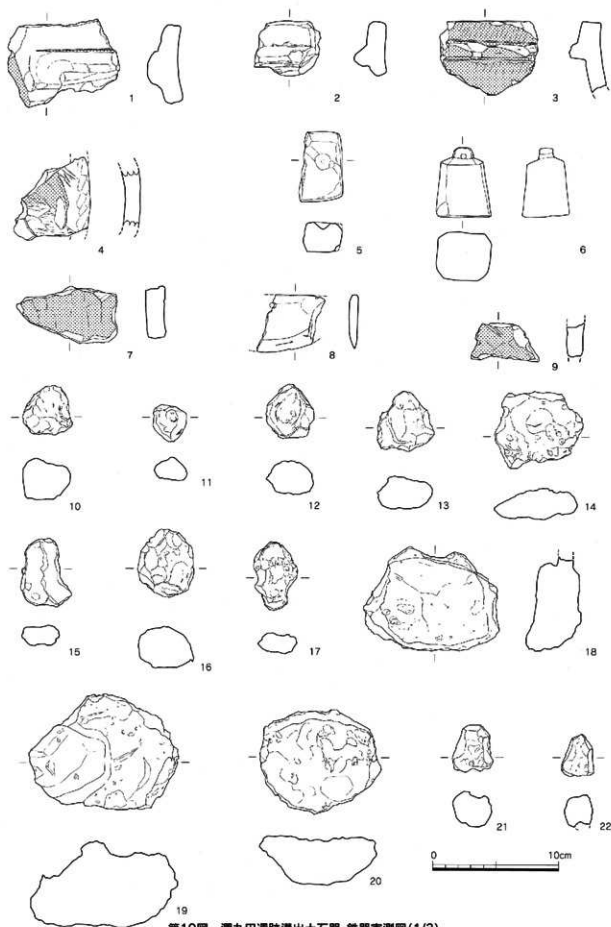
第19図7・9は滑石製石鍋の破片である。7の表面にはススが付着している。下部の断面にはケズリが認められ、石鍋片から転用品を製作する途中の石材である。9の表面もススが付着する。上部の断面にはケズリが認められ、7と同様に転用途上品といえる。15は鉄板片である。錆に覆われており、機種不明である。

17号溝 (第18図) 調査区の北側で確認された溝で、南から北に延びる。1号住居跡に切られ、幅0.3～0.4m、深さは約5cmである。弥生時代の溝と思われるが、出土遺物はない。

18号溝 (第18図) 調査区の北端で確認された溝で、南から北に延び、段落ちにつながる。幅0.50～1.15m、深さ18cmを測る。出土遺物はない。

19号溝 (第18図) 調査区の北端で確認された溝で、南から北に延び、段落ちにつながる。現代の暗渠に切られ詳細な規模は分からない。幅1.1mほどを測る。

出土遺物 (第16図13、第19図8) 13は18号溝と19号溝が重なる部分で出土した黒色土器A類である。内外面ともに磨滅が著しく調整は不明である。高台を貼りつけた痕跡がよく残る。



第19回 清丸田遺跡出土石器・鉄器実測図(1/3)

第19図8は石包丁の破片である。石材は輝緑凝灰岩である。孔の部分から割れている。

20号溝 (第18図) 調査区の北端で確認された溝で、東西方向に延びる。幅1.0~1.7m、深さ34cmを測る。断面は三角形である。溝の肩から滑石製の榫が出上した。

出土遺物 (第19図6) 滑石製の榫である。中世では石鋸転用の榫が多いが、本例は転用品ではない。高さ5.5cm、幅4.3cm、厚さ3.8cm、重さ140gを測る。しかし、左側裾部を一部欠くため、本来はもう少し重かったと思われる。平面形態は正方形に近い長方形で、側面の角はそれぞれ面取りを施す。鈕は両面から穿孔される。吉村分類1a類に該当する(吉村2000)。

21号溝 (第18図) 調査区の北側で確認された溝で、南北に延びるが、1号住居跡に切られる。幅0.5~1.1m、深さ32cmを測る。出土遺物はない。

22号溝 (第18図) 調査区の北側で確認された溝で南北方向に延びる。1号住居跡と暗渠に切られる。弥生時代の溝と思われるが、出土遺物はない。幅1.2m、深さ10cmを測る。暗渠の内側を23号溝としていたが同一のものと思われる。

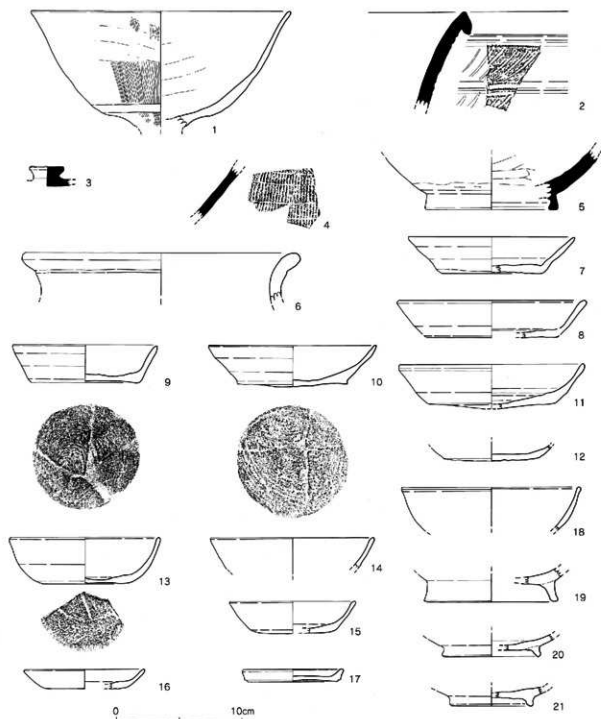
24号溝 (第18図) 調査区の北側で確認された溝で、東西方向に延びるが短い。18号溝を切るが、暗渠に切られる。幅0.32m、深さ5cmを測る。出土遺物はない。

(5) その他包含層出土遺物 (第18~22・24図)

洞丸田遺跡からは遺構から出土した遺物のほかに、包含層出土品も多い。以下、土器、石器、鉄器、青銅器の順で報告する。

第20図1は古墳時代中期の高杯の坏部である。坏部外面はタテハケを施すが、口縁部付近はナデ消している。屈曲部は不明瞭である。2は須恵器大甕の口縁部である。小片のため、径を復元できない。口縁端部は外面に折り返す。外面は口縁部下に約5cmおきに二重沈線を施し、その間を斜めのヘラ描文で埋める。口縁折り返し部を除く外面は暗青灰色、内面は淡青灰色である。3は須恵器杯蓋のつまみ部。つまみの上部は灰がかぶる。4は陶質土器壺の胴部小片。小片のため、傾きや部位は不安がある。内外面ともに青灰色で、断面にはぶい灰褐色を呈する。外面は縄文タタキののち、横方向の沈線を施す。内面はナデで当て具痕を消す。5は須恵器壺の底部片。包含層出土のせいか、やや器表面が磨滅する。内面は強いナデ、外面は回転ヘラケズリののち、高台を貼りつける。内面は淡灰色、外面は青灰色を呈する。

6は土師器の甕。口縁端部が肥厚する。断面は鈍い橙色であるが、外面は被熱のためこげ茶色を呈する。玄界灘式製塩土器の可能性もあるが、小片のため判断が難しい。7~15は土師器の坏である。7の底部には板状圧痕を残す。8は口縁端部がやや肥厚する。底部外面はヘラ切りである。9はやや小ぶりの坏で、底部から急に立ち上がる。胎土には金雲母を含む。底部外面は回転系切りである。10はやや丸みを持ちながら立ち上がる坏で、底部は糸切りののち、外面に押し出す。内面には黒斑を有する。11も底部を押し出す坏である。胎土は精選で、底部外面は切り離したのち、ナデを施す。12は土師器坏底部片。底部外面はヘラ切りである。13はやや焼きがあまり坏で、内面は一部黒色化し、炭化物も付着する。外面は丸みをもちつつ立ち上がり、底部には板状圧痕を残す。14は坏の口縁部片。端部は丸みを帯びる。15は小型の坏で、直径10cmである。底部外面はヘラ切りの後、ナデを施す。16・17は土師皿である。16は口縁部が広がる土師皿である。磨滅が激しく底部の調整は不明である。17は口縁部が直立きみの土師皿で、やや上底である。底部は切り離した後、ナデを施し、炭素を吸着させている。18~21は土師器の椀で



第20図 潤丸田遺跡包含層出土土器実測図1(1/3)

ある。18は碗の口縁部。全体的に器壁が薄く、口縁部端部も丁寧な調整を行う。19~21は碗の底部。19の高台は外に広がり踏んばる形である。20はやや広がる、21は直立ぎみの高台をもつ底部である。

第21図1~7は捏鉢と播鉢である。1は東播系須恵器の捏鉢である。口縁端部は黒色で、一部ガラス化する。器壁は全体的に薄いが、口縁部が肥厚する。口縁端部は若干つまみ上げるが、その外側は丸みを帯びる。2は瓦質の捏鉢である。図面は若干小さい印象を受けるが、小片から図化したため、復元径にはやや不安がある。外面はまず横方向のナデのち、ヨコケズリを施すが、

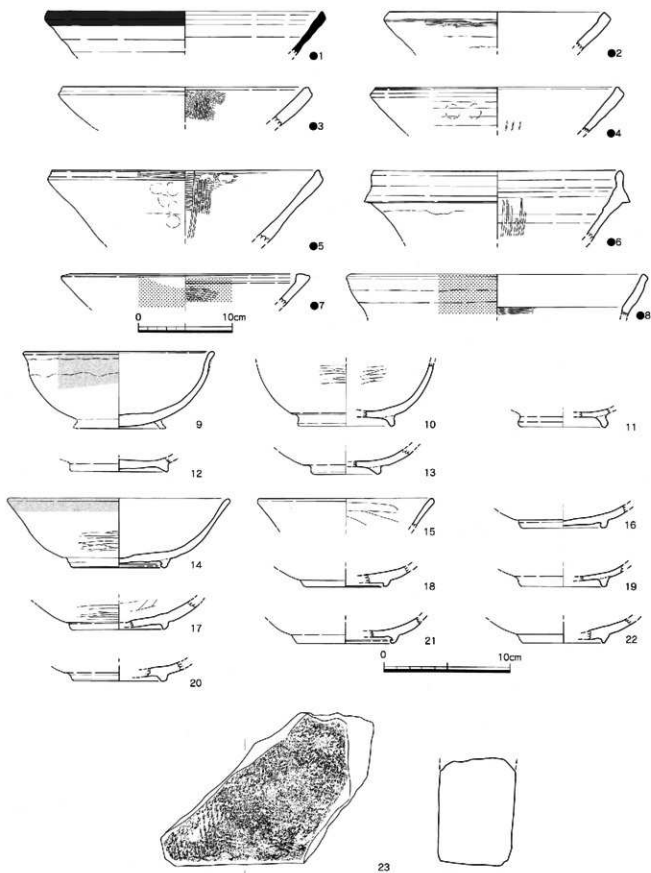
接統痕を消すまでには至らない。また、ケズリが及ばない口縁端部付近はハケメが残り、若干、肥厚する。内面は器壁が剥離するなど、雑なつくりの印象を受ける。3は瓦質の挿鉢である。外面はナデを施し、口縁端部はくぼむ。内面はハケメを施したのち、挿目を入れる。挿目は6本である。2よりは丁寧なつくりである。4も瓦質の挿鉢である。外面は口縁端部の調整や接統痕の残り方など雑な印象を受けるが、内面は丁寧なナデを施したのち、挿目を施す。挿目の上端部分で欠けているため、3本のみ確認された。ただ、挿目の間隔は8～9mmと広い。5は上質の挿鉢である。外面は接統痕をユビオサエで消すなど、凹凸が激しいが、内面はヨコハケの上に挿目を入れる。挿目は5本である。口縁端部はくぼむ。6は備前焼の挿鉢である。外面は一部接統痕が残るもの丁寧なナデを施す。内面もヨコナデのあと、6本の挿目を入れる。内面は焼きの時に胎土に含まれた気泡が膨らみ、凹凸が激しい。また、内面は灰がかぶる。7は瓦質の挿鉢。口縁部はほぼ水平で、内面に若干せり出す。外面は弱いヨコケズリが入り、内面は強いヨコナデの後に、挿目が入る。挿目は5本である。内外面ともに黒色化する。8は土師質の鍋の口縁部である。外面はスガが付着する。口縁部は反転後、緩く内湾しつつ立ち上がる。

9は黒色土器A類の椀である。内外面とも磨滅し、調整は不明である。口縁端部は反転するが、反転部の下2cm程度、器表面が剥離している。外面は口縁部付近と高台内側が黒色化している。高台は外れている。10は黒色土器B類の椀で口縁部を欠く。内外面ともに横方向のヘラミガキを施す。11～13黒色土器の底部である。11はB類の底部で高台が外に広がる。12はA類の底部で、高台が退化し、断面三角形になる。13はB類の底部で、高台が退化しつつある段階で、断面が台形である。

14～22は瓦器椀である。14の器表面は磨滅しているが、外面はわずかにヨコミガキが確認される。口縁端部から下1cm程度は黒色化する。内面も一部黒色である。15は口縁部の小片であるが残りはよい。16～22は底部の破片。16の底部外面には板状圧痕と糸切り痕を残す。高台断面は方形である。17は残りが非常によく、内外面ともににぶい銀色を呈する。外面はヨコミガキとともに、高台接統時の回転ヨコナデも明瞭に残す。18の外面は灰色であるが、内面は黒色である。高台は内面に若干突出する。19は底部の小片。内面は白灰色、外面は黒色を呈する。20の高台断面は台形である。21は高台端部内側に折り曲げる。内面は黒色化する。22は断面三角形の高台をもつ瓦器椀底部である。

23は平瓦の破片である。凸面は剥離部分が多いが、縄目タタキが認められ、厚さが6.0cmあることから、怡土城跡で多く確認される平瓦と判断される。断面は灰色であるが、突面の縄目タタキのくぼんだ箇所や凹面には炭化物が付着し黒色を呈する。端部はヘラケズリによって面取りされる。側面も一部残っている。

第22図1～14は白磁椀である。1は白磁椀II-0類か。器壁は最も薄い箇所でも2.5mm程度、胎土は白灰色である。緑味を帯びた透明に近い白釉がかかる。玉緑は小さい。2～6は白磁椀IV類の口縁部である。2は玉緑口縁をもつ白磁椀で、器壁は薄い。釉はやや緑味を帯びた白釉である。器表面の釉は薄い。3の口縁に巡る玉緑はやや小さく、一部ヒビが入る。口縁部下はやや内湾し、器壁は薄い。貫入も多い。釉は灰白釉で、外面は一部露胎である。胎土は黄灰白色である。4はつやのある乳白色の釉をかける白磁椀で、玉緑の口縁をもつ。器表面の調整はやや粗く、粒状の閉りカスが突起状に残る。また、器壁も厚い。5は乳白色の釉をかける玉緑口縁の白磁椀である。

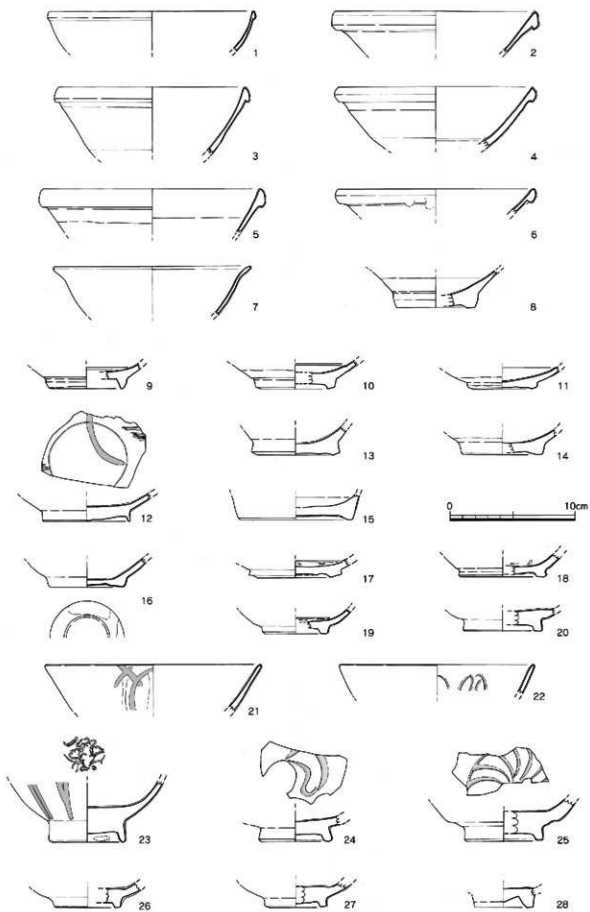


第21図 濁丸田遺跡包含層出土土器実測図2 (1/3・1/4・●は1/4)

外面の軸は口縁より2cm程度下までしかかからない。器壁は薄い。6は口縁部の小片。玉縁から軸が下に垂れている。内面は気泡が多い。7は口弁の口縁部をもつ白磁碗Ⅰ類である。軸はやや青みを帯びた乳白色でやや厚くかかる。胎土は白色である。8～14は白磁碗の底部である。8は高台内部の削りが浅く、肉厚の底部である。胎土は灰色を帯びた白色である。内面には一条の沈線を巡らす。外面はほとんど軸がつかからず回転ヘラケズリ痕をよく残す。9は底部の小片。高台は端正なつくりで、内面は深く削り、底部は薄い。内面は見込み軸を環状に掻き取り、その周りの軸には気泡が多く、荒れている。胎土は灰白色を呈する。白磁碗Ⅱ類か。10は緑灰色の軸をかける白磁底部片である。内面見込み付近に沈線を巡らし、外面には粗雑な回転ヘラケズリ痕を残す。胎土は灰色である。11は白磁碗底部片である。高台は低く、内面の削りもほとんどない。軸は灰乳白色で、見込み付近に沈線を巡らす。胎土は白灰色である。12は白磁碗底部片である。高台内面の削りは浅く、底部は肉厚である。特に中心部の削りは浅い。高台畳付の幅は2mm程度と狭い。軸は緑味を帯びた灰白軸で、外面は高台まで及ぶ。内面は見込み付近に沈線を巡らす。内面には幅広の片切彫文、櫛目文がある。13は底部片で白磁か。外面の回転ヘラケズリなど白磁と同じであるが、焼きは陶器に近い。高台内面の削りは浅く、底部は肉厚である。軸は黄乳白色である。14は白磁碗底部片。軸は乳白色で外面は高台付近までかかる。高台内面は削りが浅い。胎土は白灰色を呈する。15は器種不明の底部片である。軸は白色で、外面は高台畳付を除き、全面にかかる。内面は液状に垂れ落ちた軸は認められるが、基本的に無軸。胎土は黄白色で緻密であるが、焼きは陶器に近い。包含層出土であるため時期的に後出するものかも知れない。

16～20は越州窯系青磁碗の底部である。16は釉薬の発色がよく、色調は黄緑色を呈する。ただし、貫入が多い。軸は高台内部までかかる。高台は蛇ノ目高台で、白色砂質土の日跡が残る。胎土は灰色で緻密である。17は暗オリーブ色の軸をかける底部片である。外面は軸が確認されず、粗い回転ヘラケズリを施す。特に高台畳付のケズリは粗い。内面の見込み付近に段があり、その内側に白色砂質土の日跡が残る。胎土は灰色である。18は淡いオリーブ色の軸をかける底部片である。軸は内外面全面に施されるが、高台畳付部分は削り取られている。軸に光沢はない。内面、高台ともに白色砂質土の日跡が残る。胎土は灰色で、不純物も少なく緻密である。19はオリーブ色の釉薬をかける底部片である。外面は高台部まで軸が及ぶが、畳付から高台内面は認められない。畳付の釉薬は削り取られたものと思われる。軸は光沢をもつ。内面は見込み付近に段があり、その内側に白色砂質土の日跡が2箇所残る。本資料は約1/2の資料であるため、日跡は本来4つあると思われる。20は黄緑色の軸がかかる碗の底部片である。内面は見込み付近に沈線を巡らす。外面は高台まで軸が及ぶ。高台畳付部分は軸を削り取っている。高台内面の削りは浅く、底部は肉厚である。胎土は黄みがかった灰色である。なお、16は精製品の可能性があるが、17～20はいずれも粗製品である。

21～28は青磁碗である。21は青磁碗口縁部片で、端部は丸く、直口である。淡緑軸は厚くかかり、外面には竊連弁文を表すが、やや雑な印象をうける。胎土は白灰色である。龍泉窯系青磁碗Ⅱ類である。22は青磁碗口縁部片である。内外面ともに灰オリーブ色の軸がかかる。外面は無文であるが、内面は口縁部下に沈線を巡らし、篋描文を施す。篋描文は竊連弁文か。23は青磁碗底部である。外面は高い高台をもつが、内面の削りが比較的浅く、底部は2cmを超える肉厚



第22图 洞丸田遺跡包含層出土土器実測図3 (1/3)

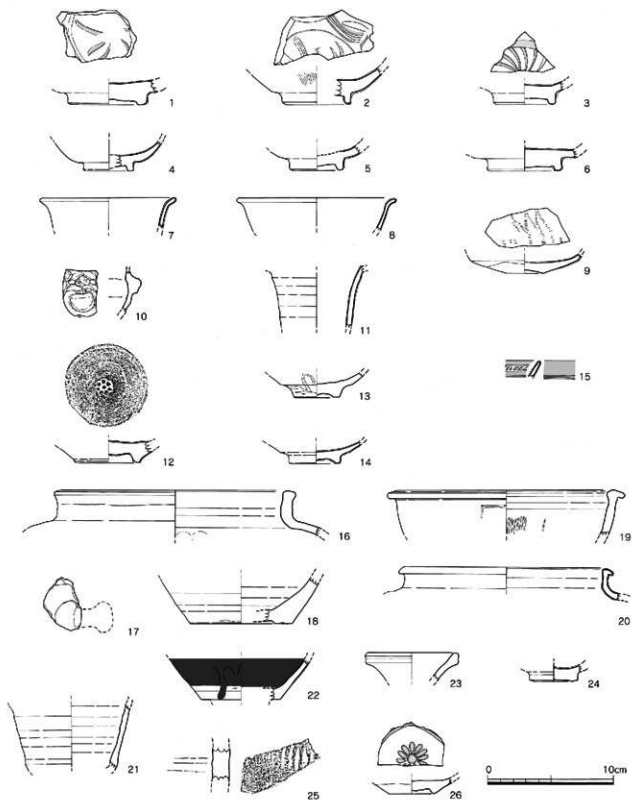
である。釉薬は内外面ともに厚く施されるが、高台内面のみ露胎である。なお、高台内側の側面には黄白色の砂質土目が残る。外面の側面には蓮弁文を施す。内面は無文であるが見込み中心に花のスタンプ文をおす。龍泉窯系青磁碗Ⅱ類か。24は底部片である。淡緑色の釉を厚くかけており、発色もよい。内面見込みには片切彫文が認められる。外面は高台まで釉がかかるが、唇付部分は削られ、高台内面には釉が及ばない。底部は肉厚で、表面には直径3cmの黄白色砂質土による目地が残る。25は黄オリーブ色の釉がかかる底部片である。内面見込みには沈線を施し、その内側には片切彫で花卉状の表現をしている。外面の整形は粗く、釉は高台内面にまで及ぶ。高台内面の削りは浅く、底部は約2cmと厚い。26は緑色の釉が厚くかかる青磁碗底部片である。意図したものかは不明であるが、見込み部分に鉄斑文がある。外面は気泡もある。釉は高台内面にまで及び、高台内面には目地痕が残る。胎土は灰白色である。27は青緑色の釉がかかる青磁碗底部片である。ローリングを受けており、内外面にかかる釉はくすんでいる。外面は高台まで釉が及ぶ。高台唇付から内面にかけては露胎である。胎土は淡灰色である。28は青磁碗の底部片である。内面には黄緑色の釉がかり、外面は釉薬が及ばない。外面は丁寧に回転ヘラケズリを施す。

第23図1～8は青磁碗である。1は青磁碗底部片である。黄オリーブ色の釉が内外面に施され、高台内面にも一部及ぶ。高台内面の削りは浅く、底部は肉厚である。また、黄白色砂質土の日地も認められる。内面は片切彫で花卉状の表現をしている。なお、この資料は高台と底部の接合具合がよくわかる資料でもある。2の高台は断面四角形で、高台内面は比較的削りが浅く、底部は肉厚となる。高台内面を除く内外面に透明度の高い青緑色の釉が厚くかかる。内面には片切彫と櫛歯による草花文が描かれ、外面には櫛歯文が表わされる。胎土は灰色で、不純物も少なく緻密である。3は内外面ににぶい緑色の釉がかかる青磁碗の底部である。内面見込みには片切彫で花卉状の表現をしている。4は青磁の小碗か。内面と高台外側まで淡緑色の釉がかかるが、ローリングを受けており、光沢を失っている。胎土は灰色で、緻密である。5は青磁碗底部の破片であるが、内面見込み部分を欠く。内外面ともに淡緑色の釉がかかるが、高台内面には及ばない。外面には気泡が多い。胎土は灰白色を呈する。6は内外面に鈍い緑色の釉がかかる青磁碗底部片である。高台内面の削りが浅く、底部が2cm程度と肉厚である。また、釉は一部高台内面にまで至る。胎土は灰色で緻密である。7は口縁部が外反するもので、龍泉窯系青磁碗Ⅳ類か。口縁端部は丸く、明緑色の釉は厚くかかる。胎土は灰白色を呈する。8は口縁端部が外反する青磁碗Ⅳ類か。釉はにぶい緑色で、胎土は暗灰色を呈する。

9は同安窯系の皿である。口縁端部を欠くが、外面は無文、内面は櫛歯でZ字状の劃花文を配置する。内外面ともに薄緑色の釉がかかるが、底部付近には認められない。胎土は灰色で緻密である。

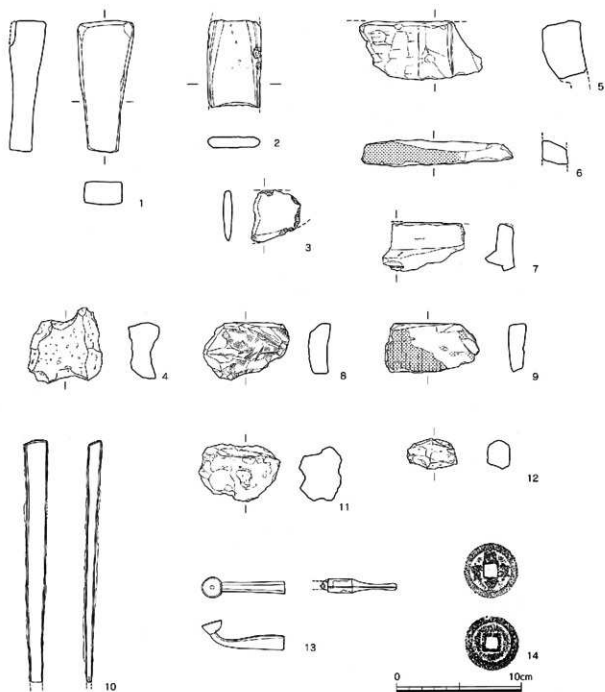
10は3.5cm×2.5cm程度の小片であるが、外面の装飾部分のみ残る。装飾は環を銜えた獅子状の動物が表現されており、おそらく対になっていると思われる。釉は青緑色で非常に透明度が高い。内面は回転ヨコナデの痕跡が明瞭に残り、上部には釉がかかる。尊形瓶の一部か。11は長頸壺か。胎土は灰色で、緻密である。内外面ともに薄緑色の釉がかかる。上端は反転する。

12～15は朝鮮半島産の陶磁器類である。12は朝鮮鮮釉陶器皿の底部片か。内面見込み中央には花のスタンプ文を施す。外面は白釉が、内面は残りが悪く詳細不明であるが、白もしくは透明



第23図 洞丸田遺跡包含層出土土器実測図4(1/3)

軸がかかる。器壁は全体的に厚い。13は朝鮮雑釉陶器で井戸茶碗風の椀である。内面には透明度がない白釉がかかり、砂目地が2箇所のこる。外面にも白釉がかかり、高台内外の釉は縮れている。胎土は黄灰色である。一乗谷朝倉氏遺跡（福井県）などに類例がある。14は朝鮮雑釉陶



第24図 潤丸田遺跡包含層出土石器・鉄器・青銅器実測図(1/3)

器の皿である。内外面ともに灰緑色の釉がかかる。白色砂質土の目地がよく残り、内外面ともに6箇所確認される。胎土は灰色で砂粒が混じる。15は象嵌青磁の小片である。端部は丸くおさめ、緑色の釉をかける。象嵌は白色である。外面には二重の直線を、内面は三角文と一本の直線を象嵌で表現する。

16は陶器壺の口縁部である。口径は小片からの復元であるため、やや広い可能性もある。頸部は直線的に立ち上がり、口縁端部はつまみ出す。胎土は砂粒を多く含む。17は褐釉陶器の耳付近の小片である。褐釉は外面のみで、内面は回転ヨコナデを施す。18は陶器壺の底部か。底部裏面は削りを入れ、高台状に加工する。外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ヨコナデを施す。胎土は灰色である。

19は陶器の播鉢の小片である。口径は復元で18.9cmを測る。胎土は淡い赤紫色で、緻密である。器表面は内外面ともに茶色である。口縁は小さく反転させ、器表面にはカキメを施す。内面には播目が認められるが、現段階で9本確認できるか一単位何本から構成されるか不明である。また、播目の隣に透かしがある。注ぎ口であろうか。このような形態の播鉢は国内産にみられず、中国産と思われる(荻野2000)。荻野繁春氏の分類によると、本例は内面に播目をもち小型でハンマー型の口縁部をもつことから、II3類に該当する。中国産の播鉢は論文発表時の集成で72遺跡から210例確認されており、博多遺跡と大宰府関連遺跡群を中心に出土している。そのうちII3類は博多遺跡70次調査(井沢編1994)3例と御笠川南糸坊遺跡6次調査(前川他編1977)1例の合計4例が確認されているのみである。

20は施釉陶器の壺か。小片であるため、口径の復元は不安がある。内外面ともに淡緑色の釉を薄くかける。直線的に立ち上がる頸部に外に折り返す口縁部がつく。21は陶器片である。器壁が薄く、内面にはヨコナデを施す。外面はヨコナデの後、ナデを消している。径も小さく小型の壺状になると思われる。内面と胎土は濃い灰色で、外面は茶褐色の地の上にこげ茶色が点状に入る。22は黒釉の椀か。内外面ともに黒釉を施し、外面は一部が液状に垂れている。外面の露胎部分は回転ヘラケズリである。胎土は灰色を呈する。23は雑釉陶器の口縁部片である。釉薬は火を受けたせいか白色化しているが、本来は透明度の高い褐色釉で、内外面ともに釉がつかかる。胎土は灰色でやや軟質の印象を受ける。24は黒釉の椀か。黒釉は内面に厚くかかる。外面は回転ヘラケズリを施し、高台内面は非常に浅く削る。25は常滑大甕の胴部か。小片のため、傾き等は不明である。外面には釉がつかかり、タタキも残る。内面は無釉でヨコナデを施す。26は施釉陶器の皿か。内面見込みに一条巡らし、中央に花文を描く。内面と外面の上部に白みがかかる透明釉を施す。底部は削りを入れ高台状にする。胎土は乳白色でしまりはしない。

第24図1は砥石である。全ての面で使用痕が認められる。裏面の一部は欠けている。日は比較的細かい。2は磨製石剣の上部の破片である。切先を欠く。3は石包丁の破片である。小片のため孔の有無は確認できない。石材は輝緑凝灰岩である。4は軽石製の浮子である。上下に挟りを入れる。5～9は滑石製石鍋の破片である。5は耳付石鍋の破片で、把手は口縁部までいたる。6は石鍋胴部の破片で、外面はススが付着する。右側は新しいケズリが入る。7は鈎付石鍋の口縁部の破片で、やや稜味を帯びた滑石製である。鈎の下の割口には新しいケズリが入り、何かに転用しようとしたものと思われる。8は口縁端部の石鍋片である。口縁端部は一部残るが左下は新しいケズリが入り、表面にも工具痕が残る。9は石鍋口縁部の破片である。表面の半分以上は剥離している。口縁端部は残っており、断面下部の一部は新しいケズリが入る。

10は棒状の鉄製品である。長さ19.2cm、幅1.0～1.8cm、幅0.5～1.0cmを測り、先端部を欠く。本例は包含層出土品で、調査の前は水田として使われていたことから、馬鎌の刃と思われる(桃崎2008)。11・12は鉄滓である。13は煙管である。銅銭は2枚出土しているが、永樂通宝は小片のため採拵できていない。14は磨耗が著しいが、折二銭の熙寧重宝である。1071年初鑄で、書体は真書である。列島内の出土銭における組成比率は0.1%で、博多や沖縄、対馬などでの出土数が多い(永井2002)。

【参考文献】

井沢洋一編1994『博多41』福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第370集

- 荻野繁春2000「中世日本で播鉢として使われた中国産の鉢」『金沢大学考古学紀要』25
- 佐藤浩司2006「スタンプ文を有する瓦質土器の展開」『吉岡康暢先生古稀記念論集 陶磁器の社会学』
- 茶道資料館編1990「遺跡出土の朝鮮王朝陶磁—名碗と考古学—」
- 永井久美男2002『新版 中世出土銭の分類図版』高志書院
- 前川威洋・新原正典・馬田弘聡編1977『御笠川南条坊遺跡(3) 福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第6集 福岡県教育委員会』
- 宮崎亮一編2000『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』太宰府市の文化財第49集
- 桃崎祐輔2008「中世の棒状素材に関する基礎的研究」『七隈史学』10
- 山本信夫・山村信榮1997「九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集
- 吉村靖徳2000「権衡に関する一考察—福岡県内出土権状製品の検討と課題—」『九州歴史資料館研究論集』20

第4章 まとめ 舗装道路について

(1) 潤丸田遺跡舗装道路の時期的位置づけ

本文でも報告したように、潤丸田遺跡では南北に延びる舗装道路が確認された。幅1.5m～2.0m、長さは調査区内で32m検出し、舗装材は石を主体とするが、一部瓦片や鉄滓も混じる。舗装材とした石は小兒人頭大以下のものを用い、石の大きさに規格・統一性はない。石は地山を平らに整形したうえに置かれるが、その隙間には砂利や小石を充填している。舗装面は硬化していた。舗装の中には土器片が混じるが、舗装材として用いられた可能性もあり、道路の時期を特定する材料としては不安もある。また、道路の両側面には溝が並行して延びているが、道路の断面を確認すると溝の埋没後、くぼみ状になった段階で、舗装が施されたことが確認された。しかし、報告でも記したように、舗装道路が敷設される前にも道路があり、その道路に伴う側溝であると判断される。

舗装部分からの出土遺物は陶磁器類、土師質・瓦質の日常土器、瓦、鉄滓など多様である。時期は8～16世紀に位置づけられるが、これらには舗装材として用いられたものもあり、道路の年代を特定するには至らない。そこで、舗装道路に切られる溝の時期から時期を特定していく。上の報告でも記したように舗装道路は1・2号溝、11・15・16号溝を切る。特に2・15号溝は舗装の下に潜っており、舗装道路の上限を示す良好な資料であると考えられる。溝からは黒色土器など古いものも出土している。また、白磁や青磁も11世紀後半から12世紀後半の資料が多い。新しい遺物は在地の土鍋や捏鉢、播鉢などがある。これらはおおよそ15世紀代に位置づけられる(山本・山村1997)。最も新しい遺物は、小片であるが瓦質土器の深鉢形の火舎である(第15図21)。これは佐藤D類に該当し、15～16世紀とやや幅広く位置づけられる(佐藤2006)。また、同様の火舎が舗装道路の中からも出土している。なお、下限は包含層出土品を含め、近世の遺物がほとんど出土していないことから、16世紀中には終焉を迎えていたと思われる。そのため、潤丸田遺跡の舗装道路は主に15～16世紀に機能したと判断される。

なお、石敷道路は1・2号溝や11号溝を切っており、溝より新しい時期に敷設されているが、溝自体は道路に沿って掘削されているため、12世紀後半頃に舗装を伴わない道路(調査では地山の整形のみの確認にとどまる)とともに溝が掘削され(1期道路)、15世紀のある段階に溝を

切の形で舗装が行われたと考えられる(Ⅱ期道路)。このような事例は、後で紹介する宮城県仙台市に所在する王ノ塚遺跡・大野田古墳群でも確認されている。

(2) 舗装道路の南北に想定される施設について

調査区内で、中世の遺構は道路と側溝のみが確認されており、道路の延長線に位置する南北側にどのような施設が存在するのかが現段階では不明である。しかし、北側に関しては、調査区北端で遺構面が北に向かって急傾斜で落ちてなくなることが確認できた。一枚北側の水田で試掘を行うと0.8～1.0mほどで水が湧きだし、遺構面は認められなかった。このことから潤丸田遺跡は西側の加布里湾から湾入する入江に面していたと考えられる。なお、道路そのものは調査区の北西側から一部現道の下に潜っており、遺構面の北端と直接接するわけではないが、現道下(もしくは現道東側の水田)で入江に接すると思われる。もちろん道路と入江が接する場合、船着場などの港湾施設の存在が想定される。

港湾施設について、村井章介氏は港の最小限の構成要素として①船着き、②港にすむ住人の家、③宗教施設を挙げており(村井1996)、市村高男氏は港の存在基盤として、④内陸へのアクセスの手段(川・道)、⑤物資の消費地(有力な寺社や領主の本拠地)の存在を指摘する(市村1996)。これらの要素や基盤を潤丸田遺跡で対照してみると、

- ① 船着き；立地や環境から想定されるものの未確認
- ② 港にすむ住人の家；調査区の幅が狭く未確認(調査区の1/2程度は道路と側溝)
- ③ 宗教施設；未確認
- ④ 内陸へのアクセスの手段；直線舗装道路
- ⑤ 物資の消費地；南側に居館の堀の存在(潤古屋敷遺跡)

のようになる。①と②は調査区の制限により現段階では確認できないものの、将来的に周辺部の調査が進むことで確認できると考える。よって、港湾施設の存在を積極的に否定されるものではない。③については現段階では未確認である。しかし、江戸時代後期に纏められた『筑前国統風土記拾遺』の潤丸田の箇所「観音堂の北三十歩斗に香殿という田あり。平等寺守衛の居たりし跡なりとぞ。」とある。現在、潤丸田地区には香田という地名が残っており、香殿が香田へと変化した可能性も考えられる。なお、香田は潤丸田遺跡の150mほど南に位置しており、発掘調査も実施している(潤香田遺跡)。この遺跡からは寺院や有力武士の館から出土する傾向を示す象嵌青磁陶枕も出土しており注目される(平尾2010)。このように潤丸田遺跡では宗教施設は確認されていないものの、完全に無関係とはいえないようである。④の内陸へのアクセスの手段は舗装道路が該当する。⑤の物資の消費地は潤丸田遺跡の70mほど南側に位置する潤古屋敷遺跡で確認された堀が巡る居館が該当する(註1)。なお、潤香田遺跡と潤古屋敷遺跡の調査成果は来年度以降の報告予定となっている。

このように、港湾施設の構成要素・存在基盤として先学が掲げた①～⑤の条件の大半に潤丸田遺跡は該当しており、道路の北側には港湾施設が存在する可能性が高いといえる。加えて、折二銭や当十銭、権の存在も港湾施設の存在を支えるものといえる。また、南側は上で述べたように居館へ向うと考えられる(註2)。

(3) 他地域の舗装道路との比較と分類

道路について辞書で調べてみると「人や車などが通行するために設けられた通路」とある。現代の道路は一定の線形と幅員をもち、表層・基層・路盤などの舗装体と、路床から構成されている。ただ、中世の道路の場合、硬化面は確認されるものの舗装するものは少ない状況にある。

このような状況の中、中世博多の道路を集成・分類した大庭康時氏は、道路の路面には

A.石敷き、砂利敷き、瓦敷き、土器・陶磁器敷きなど人工的に加工を施したものの。

B.堅くしまった路面（硬化面）をもつもの。

C.道路の整地面から路面が推定できるもので、明らかな硬化面が認められないもの。

の大きく3種類認められることを指摘した（大庭2001）。今回報告した潤丸田遺跡の舗装道路は大庭氏の分類に従うならばA類に該当する。

しかし、本項では道路の性格による分類を企図することから、まず、列島内の主要な中世舗装道路を、発掘調査報告書等から概観してみる。

・蒲田遺跡（福岡県福岡市東区）

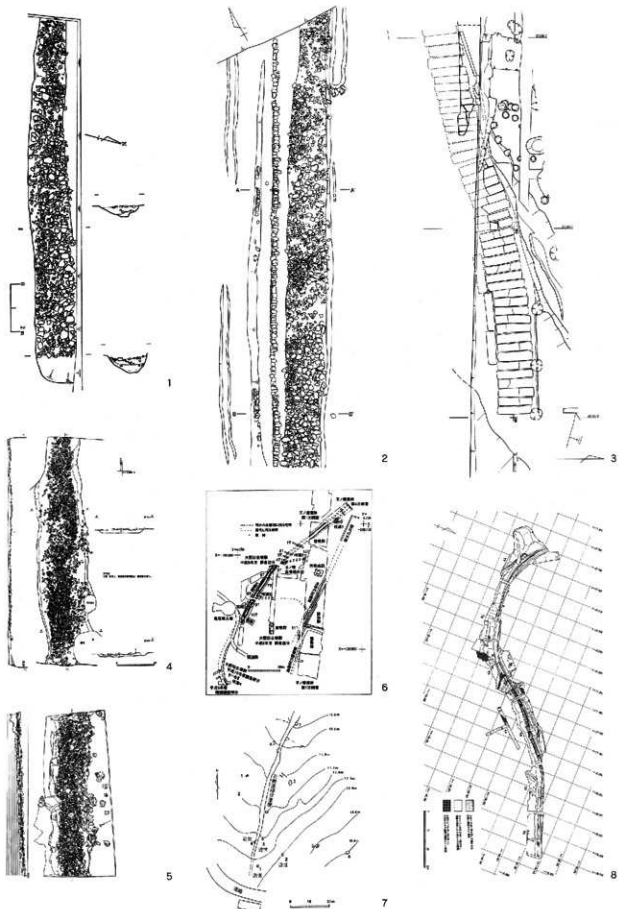
蒲田遺跡は福岡平野の北東端に位置する遺跡で福岡東インターの建設に伴い調査が行われた。この遺跡では旧石器・縄文時代～中世までの遺構が確認されており、中世関係では舗装道路が特記される。報告書では舗装道路は「敷石遺構」として報告されている。調査区内では南北と東西に延びる2本の舗装道路が確認されており、調査区の中央部で直交する。直交部分には切り合いは認められないことから、同時並存であると考えられる。なお、南北道路は全長48m、幅6mで確認され、両側に側溝をもつ。なお、舗装石材には、「極端に大きい石は用いられず、大きさや、石質など、石自身には、統一性、特殊性はない」ものを用いている。道路の時期は特定されていないが、12～15世紀と幅広く想定している。なお、道路の他には溝や土坑が確認されている（飛高ほか編1972）。

・博多遺跡1次調査（福岡県福岡市博多区）

博多遺跡で確認された最初の道路は聖福寺と柳田神社をつなぐ参道として整備されたもので、13世紀中頃に位置づけられる。博多遺跡群で確認されるその他の道路は14世紀のものが多く、遺跡群を縦断する幹線道路（幅約6m）とそれに交差する支道に分けられる（本田2008）。このうち、舗装されたものは1次調査で確認された（池崎編1997）。調査地点は東長寺の境内である。なお、東長寺は弘法大師が大同元（806）年に開いたと伝えられる。調査区は約470㎡である。舗装道路は報告書では「舗道状遺構」と報告されるもので、調査区の北端、標高約3.0mで確認され、東西方向に伸びている。幅は1m強で両側に側溝をもち、長さ9mほど確認されている。舗装は瓦、陶磁器の小片、小礫を敷き詰め、酸化鉄、マンガン分で路面は硬化していた。出土遺物は小片で図化されていないが、14世紀半ば以降に舗装されたとする。

このほか、博多遺跡35次調査第3面道路は玉砂利と貝殻で舗装されており（加藤編1988）、都市計画道路博多駅築港線関係1次調査では割れた瓦を敷き詰めた舗装道路も確認されている（池崎編1988）。

なお、博多遺跡で確認される14世紀を前後する時期に整備された道路は鎮西探題によるものと考えられ、16世紀末の太閤町制直前まで機能していたと考えられている（大庭2001）。



第25図 各地の舗装道路

・大宰府桑坊跡248次調査（福岡県太宰府市）（第25図4）

鎌倉時代後期に守護館が置かれたとされる観世音寺東側の御所ノ内地区で確認された舗装道路である。標高35.5m付近で確認され、延長方向はN-2°-Wでほぼ南北方向に延びている。一部、攪乱と土坑に切られるが、調査区内において幅2.35～2.90m、長さ12m確認されている。舗装は5～15cm程度の礫を多用しており、石材の大半は花崗岩である（北川・香川編2006）。遺物は土師皿、砥石、鉄釘などが確認されている。なお、本調査区では5つの遺構面が確認されたが、舗装道路は第Ⅲ面で確認されている。第Ⅲ面は13世紀第2四半期に位置づけられ、道路のほか、礎石建物、井戸、掘立柱建物、溝、土坑も確認されている。

・榎田遺跡（長崎県松浦市）（第25図7）

松浦市は長崎県北松浦半島の北東部に位置し、佐賀県伊万里市と境を接する。確認された道路は「石敷道路状遺構」と報告されるもので、長さ80m、幅1.0～1.2m、舗装の厚さ40～50cmを測り、南北方向に延びているが（安楽・中田編1985）、直線ではなく、若干西側に膨らむ形で敷設されている。道路は標高10～14m付近で確認されており、北側にある海へ向かって落ちている。調査担当者は海岸付近に船着場が存在し、道路はそこへ向かうと考えている^{註3}。道路の構築方法は両側に大きな自然石を配置した後に小礫を埋め込む方法で、潤丸田遺跡とほとんど同じ方法といえる。舗装道路の時期は12～14世紀が想定されている。榎田遺跡では舗装道路のほか、土壇墓や掘立柱建物も確認されている。

・今福遺跡（長崎県南島原市）（第25図5）

北有馬町は島原半島の南麓に位置し、有明海を挟んで宇土半島と面している。今福遺跡は標高26m付近に位置する遺跡で、弥生・古墳・中世を主体とする遺跡である（町田・宮崎編1986）。道路はC15区グリッドで確認された。幅1.5m、長さ8.5m確認されており、北西から南東に向かって緩く下る。しかし、グリッドが狭小であるため、全体の様相は明らかではない。舗装の構造は道路の両端に直径40cm前後の礫を並べたのち、その内側に拳ほどの礫を並べている。地山は安山岩の風化礫が露出しており、凹凸面を残す。調査区が狭いためかもしれないが、側溝は確認されていない。遺物は青磁碗、白磁皿、糸切の土師皿が出土しており、13世紀中頃に敷設され14世紀代に用いられたとされる。

・横尾遺跡群第68次調査（大分県大分市）

大分市は大分県の中部に位置し、別府湾に面している。横尾遺跡は大分平野のなかの大分川と大野川に挟まれた箇所に位置する。舗装道路は68次調査で確認され、南北方向と北西方向に延びている。舗装材は拳大の礫で、礫の直上には地山の黄褐色ローム土ブロックを粘質の黒色土とともに充填している（永松1999）。道路の幅は図面から復元すると約3.6m、長さ約17m確認されている。道路からは龍泉窯系青磁碗、土師質火鉢、備前焼播鉢などが出土しており、これらから、道路の廃絶時期は16世紀末に位置づけられている。

・蓮花寺跡（熊本県多良木町）（第25図1）

多良木町は熊本県の南東端に位置する町で、南東部・南部で宮崎県に接している。町の中央部のやや北寄りを球磨川が東西に流れており、蓮花寺跡は球磨川北岸の堤防沿いに位置する。蓮花寺跡で確認された遺構は石積基壇、五輪塔102基、板碑24基、舗装道路である（隈・杉村・松本編1977）。舗装道路はB区のトレンチ調査（B-F、Gトレンチ間）で確認されている。報告書

では「石敷溝」とされるが、報告の後半で「道路（通路）とも考えられる」とある。舗装道路は長さ約26m、幅1.1～1.7mを測る。報告で「溝」とされているように断面を観察すると、地山は溝状に掘り窪められ、半円形を呈する。埋土は粘質土で最上層に拳大から人頭大の円礫（川原石か）を敷き詰められている。南西方向から北東方向に伸びるが、調査区の北端で北側に向きを変える。標高159mほどである。遺物は礫と礫の間から龍泉窯系青磁碗や糸切りの土師皿が出土しているものの、小片であるため図化されていない。なお、蓮花寺は嘉祿2（1236）年、相良頼氏により建立され、その後永正11（1514）年に相良長毎、満乗丸が再興したとされることから、13世紀前半以降に敷設されたと思われる。また蓮花寺跡の北東側800mには相良頼景館跡が存在する。

・粟鹿遺跡（兵庫県朝来市）（第25図2）

旧朝来郡山東町に所在する遺跡である（深井ほか編2007）。山東町は兵庫県中部に位置し、旧岡の但馬・丹波の国境にあたる。道路は粟鹿遺跡E地区の南西隅から北東方向へ幅約2m、長さ80mにわたり直線で確認されており、石で舗装されている。側溝も存在する。標高は139m付近である。舗装道路の南側延長線上に粟鹿神社鳥居が位置することから、粟鹿神社の参道と考えられる。粟鹿神社は式内社で、但馬国一宮でもある。なお、昭和20年代の米軍撮影の航空写真や明治時代の地図からこの舗装道路は総延長500mに達すると判断される。

舗装道路の時期は12～13世紀の遺物包含層を基盤とし、14～15世紀の遺物包含層に覆われていることから、13世紀以降15世紀の間に整備されたと思われる。なお、この道路は整備後、昭和52年ごろまで神社の参道として形態をとどめていた。

・京都右京二条三坊七町（京都府京都市）

1978年に京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を実施し、百瀬正恒氏の論文で写真と簡単な解説が示された（百瀬2005）。百瀬氏によると、この調査で東西方向に延びる春日小道が確認され、側溝と舗装された路面が確認された。側溝は10世紀に埋没するが、路面には小石や砂利が敷かれている。出土遺物は少ないが、龍泉窯系青磁が出土しており、すくなくとも13世紀代まで機能したものとされる。しかし、道路幅や調査区内で確認された長さなどの記載はない。

・上平寺南館遺跡（滋賀県米原市）（第25図8）

旧坂田郡伊吹町に所在する遺跡である。平成17（2005）年に米原町・山東町と合併し、米原市となっている。旧伊吹町は滋賀県の北東部、伊吹山（標高1,377m）の麓に位置し、岐阜県と境を接する。上平寺南館遺跡は伊吹山の南麓、標高308m付近に位置する。この遺跡に隣接して上平寺館跡・上平寺遺跡、北西側の標高660m付近には上平寺城跡が認められる。なお、これらの遺跡は永正2（1505）年に一族の内紛を取めた京極高清が北近江支配のために整備した施設とされる。京極氏関連の遺構としては守護館、武家屋敷、城下町、山城、山岳寺院などが良好な状態で確認され、平成16（2004）年2月27日に国の史跡に指定されている。

舗装道路は大部分の調査区で検出され、「砂利敷道路跡」と報告されている。道路の幅は1.15～1.95m、長さは約180mを測り、東西方向に延びている。舗装の厚さは4～6cmで、2・3cmの玉砂利を敷き詰めている。道路の時期は出土した遺物から15世紀末～16世紀前半に位置付けられ、京極氏が上平寺に居館を構えたとされる永正2（1505）年から大永3（1523）年にほぼ該当す

る。なお、この道路より古い段階の舗装道路も確認されており、北国脇往還と想定されている（稲葉編2000）。

・福井城跡（福井県福井市）（第25図3）

福井城は徳川家康の次男である結城秀康が越前68万石の地に築いた城で、1601（慶長6）年に造営をはじめ、1606（慶長11）年に完成したとされる。平成14・15年度の調査で福井城築造当初の石垣が確認され（石垣Ⅱ）、その下に北庄城期の石垣が確認された（石垣Ⅰ）。この石垣Ⅰに切られる形で確認されたものが「板石敷通路状遺構」である。この通路は西南西から東方へ下降し、ゆるやかに湾曲しつつ延びる。確認された総延長は約20mで、標高は4.2～7.5mである。板石の石材は笏谷石で、幅1.77～1.90m、奥行0.43～0.52m、厚さ0.13～0.16mのものが多い。

通路が構築された時期は、通路の造成土に含まれる遺物から16世紀後半を中心とする時期が与えられ、通路上の一部には焼土・炭化物の堆積が認められることから、北庄城落城以前、つまり1583（天正11）年以前に位置づけられる。しかし、現段階では道路ではなく、報告にあるように通路と認識される。おそらく施設内の通路であろう。この通路を道路とするには調査区外延長線の確認が必要となるだろう。

なお、福井城跡ではこのほかに中世の石敷道路も確認されている（赤澤編2004）。

・王ノ壇遺跡・大野田古墳群（宮城県仙台市）（第25図6）

仙台市太白区に所在する遺跡で、名取川とその支流である荒川によって形成された標高10m前後の自然堤防上に立地する。道路跡（主要道・枝道）は王ノ壇遺跡・大野田古墳群にまたがり確認されている。主要道は5期にわたり営まれているが、舗装を施すのは3期の道路のみである。3期の道路では河原石を横位に配置し、石と石の隙間には砂を充填させ、硬く締まった状態で確認された。道路の標高は9m前後で、幅約5m、長さ370mほど確認されており、南西から北東方向へ延びている。時期は出土品から13世紀後半から14世紀前半の鎌倉時代後期を中心とした時期に比定されている。なお、遺跡の周囲には、一辺約50mを測る方形居館が確認されており、主要道から枝道（幅1.3～2.0m、舗装なし）が延びている。

王ノ壇遺跡・大野田古墳群で確認された主要道は中世の道路の中では大規模な部類に入ることから『吾妻鏡』などに見られる鎌倉と陸奥国をつなぐ「奥大道」の可能性が指摘されている（竹田1999）。

その他、草戸千軒遺跡（広島県福山市）、坂下遺跡（岩手県平泉町）、平泉寺（石川県勝山市）、八王子城跡（東京都八王子市）、天城遺跡（熊本県菊池市）などで舗装道路は確認されている^(註4)。

これらと上で概観したものと合わせて、舗装道路の性格から分類するならば、

舗装道路Ⅰ類；幹線道路（王ノ壇遺跡・大野田古墳群）

舗装道路Ⅱ類；町中道（博多遺跡・草戸千軒遺跡・蒲田遺跡）

舗装道路Ⅲ類；舗装道路の目的地が明らかなもの。

ⅢA類；寺社関連（粟鹿遺跡、平泉寺、蓮花寺、坂下遺跡）

ⅢB類；港湾関連（櫻橋田遺跡、潤丸田遺跡）

ⅢC類；城館関連（上平寺南館、八王子城跡、大宰府条坊跡、福井城跡）

舗装道路Ⅳ類；その他（横尾遺跡）

と分類できる。

I類は現在、鎌倉と陸奥国をつなぐ「奥大道」と想定されている王ノ壇遺跡・大野田古墳群程度で、確認事例は少ない。幹線道路であるため、幅員が広い傾向にある。

II類は町中道で、全ての道路が舗装されていたわけではない。博多遺跡では何度も整地が行われ、硬化面をもつ道路も多いが、舗装されているのは一部分である。また、舗装も川原石を配置して砂利を充填するのではなく、瓦や陶磁器、小礫を敷き詰めたもので、比較的簡易的な舗装であると考えられ、日常的な補修も可能なものである。

III類はそれぞれ目的地が明らかなものである。幅員は1.0～3.0m程度とI類よりかなり狭いことが特徴で、幅員だけで比較するならば王ノ壇遺跡・大野田古墳群で確認された枝道程度の規模である。しかし、道路の一端が目的地と近接しており、道路の性格にも迫りうる可能性を含んでいる。

IV類は現段階での位置づけで、現段階では道路の性格が明らかにできないものである。今後の調査の進展により、性格が明らかになる可能性が高い。

今回報告した潤丸田遺跡で確認された舗装道路は、示しているようにIII B類に該当する。しかし、道路とは本来、二つ以上の目的地をつなぐ役割をもっており、潤丸田遺跡の南側に位置する潤古屋敷遺跡（次年度以降報告予定）では、居館もしくは寺院の堀と思われる遺構も確認されている。このように道路の両端が明らかにできる可能性を持つ舗装道路の事例は希少であり、その性格ならびに敷設全体の解明が今後の大きな課題といえる。

(4) おわりに

以上のように、潤丸田遺跡で確認された舗装道路の位置づけを試みたが、現段階では遺構のみの検討に終始しており、報告にあるような折二銭や権などの出土品を絡めた検討はできなかった。これらの検討は個々の遺跡ではなく、地域単地での検討が有効であると考えられる。ただ、本遺跡が所在する糸島地域の中世遺跡については、その重要性は認識されながらも、研究は決して活発であるとは言えない。しかし、近年、「第2章 位置と環境」で記したような資料紹介など基礎的な研究も徐々に進められてきている。次年度以降の報告では、これらの成果を加え、潤遺跡群の性格を明らかにしていく予定である。本報告はその嚆矢的なものとしておきたい。

[註]

- 1) 潤古屋敷遺跡の報告は次年度以降に予定されているため、堀に囲まれた区画を居館とする見解は現段階の認識であり、出土資料等の整理の進展により、性格付けが変更される可能性がある。
- 2) 折二銭や当三銭は大型銭に含まれ、博多で最も多く確認されている（小畑・西山2007）。小畑弘己氏は東アジアの貿易都市として位置づけられる博多遺跡では実際に用いられた流通銭として機能したと考える（小畑1997b）。特に今回報告した潤丸田遺跡の折二銭は包含層出土であることから「廃棄・遺棄銭」（小畑1997a）に該当し、実際の流通の一端を示す資料といえる。また、権は古代では大宰府跡、中世では博多遺跡に集中する傾向があり、権が（貿易）都市に密着した資料であることが指摘されている（吉村2000）。
- 3) 安楽勉氏御教示。
- 4) 先行研究による。

【参考文献】

- 赤澤徳明編2004『福井城跡』福井県埋蔵文化財調査報告第79集
- 安楽勉・中田敦之編1985『榎田遺跡』長崎県文化財調査報告書第76集
- 飯村均2005『遺構としての「みち」、「みち」からみえる遺跡』『中世のみちと橋』高志書院
- 池崎謙二編1988『都市計画道路博多駅港線関係埋蔵文化財調査報告（1）博多』福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第183集
- 池崎謙二編1997『博多60』福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第543集
- 市村高男1996『中世後期の津・港と地域社会』『中世都市史研究3 津・泊・宿』新人物往来社
- 稲葉隆宣編2000『上平寺南館遺跡』中山間地域総合整備関係遺跡発掘調査報告書1-2 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課/財団法人滋賀県文化財保護協会
- 永松広大1999『横尾遺跡群第68次調査（多武尾遺跡）』『大分市埋蔵文化財調査年報』10大分市教育委員会
- 大庭康時2001『福岡市内検出の古代・中世道路遺構について』『博多研究会誌』9
- 小畑弘己1997a『出土銭貨にみる中世九州・沖縄の銭貨流通』『文学部論叢』熊本大学文学部
- 小畑弘己1997b『九州・沖縄における出土銭貨研究の現状と課題—九州・沖縄銭貨出土遺跡地名表—』『先史学・考古学論究』II
- 小畑弘己2008『銭貨』『中世都市博多を掘る』海鳥社
- 小畑弘己・西山絵里子2007『中世博多における出土銭貨と流通』『市史研究ふくおか』2
- 加藤良彦編1988『博多12』福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第177集
- 北川朗久・香川達郎編2006『大宰府条坊跡35』太宰府市文化財調査報告書第96集
- 隈昭志・杉村彰一・松本健郎編1977『蓮花寺跡・相良頼景館跡』熊本県文化財調査報告第22集
- 佐藤浩司2006『スタンプ文を有する瓦質土器の展開』『吉岡康暢先生古稀記念論集 陶磁器の社会史』
- 竹田幸司1999『仙台市王ノ壇遺跡・大野田古墳群・南小泉遺跡の中世道路跡について』『中世のみちと物流』山川出版社
- 飛高志雄・藤田和裕・二宮忠司・力武卓治編1972『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 蒲田遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第33集
- 百瀬正恒2005『中世都市京都の路と町一路面余地の使われ方を中心に』『中世のみちと橋』高志書院
- 平尾和久2010『糸島市酒井田遺跡出土の高麗青磁陶枕について』『七隈史学会第12回大会研究発表報告集』
- 深井明比古ほか編2007『栗鹿遺跡』兵庫県文化財調査報告書第323冊
- 本田浩二郎2008『中世博多の道路と町割り』『中世都市博多を掘る』海鳥社
- 町田利幸・宮崎貴夫編1986『今福遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第84集
- 村井章介・藤原良章編1999『中世のみちと物流』山川出版社
- 村井章介1996『港町めぐり』『中世都市史研究3 津・泊・宿』新人物往来社
- 山村信榮2008『大宰府』『中世都市博多を掘る』海鳥社
- 山本信夫・山村信榮1997『九州・南西諸島』『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集
- 古村靖徳1995『権衡に関する一考察—福岡県内出土権状製品の検討と課題—』『九州歴史資料館研究論集』
- 20
- 渡辺哲也1994『古道について』『古文化談叢』33

写真図版



a. 瀬丸田遺跡から可也山を望む

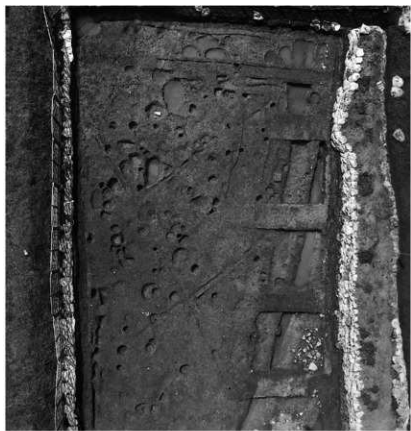


b. 瀬丸田遺跡から南を望む

图版 2



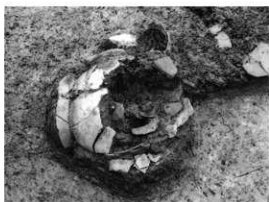
铺装道路全景



调查区南侧全景



a. 1号住居跡全景



b. 1号住居跡土器出土状況

図版4



a. 1号土坑全景



b. 3号土坑全景



c. 4号土坑土器出土状況



d. 9号土坑全景



e. 舗装道路舗装状況



f. 舗装断面



g. 舗装を除去した道路



h. 舗装を除去した道路



a. 舗装道路と16号溝



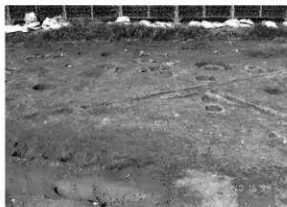
b. 舗装道路と11・16号溝



c. 15号溝土層断面



d. 11号溝土層断面



e. 7・9号溝全景



f. 8号溝全景



g. 20号溝全景



h. 掘出土状況

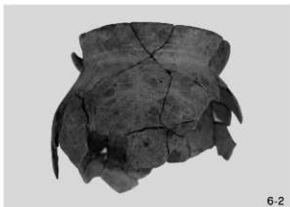
图版6



1号住居跡出土土器



6-1



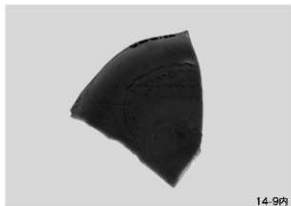
6-2



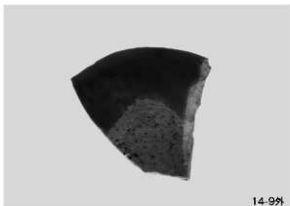
6-4



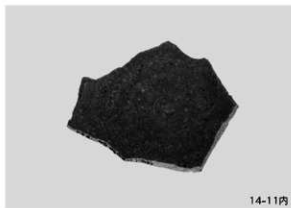
10-9



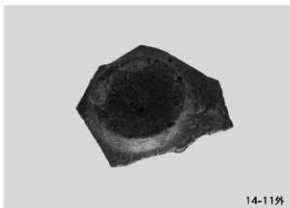
14-9内



14-9外

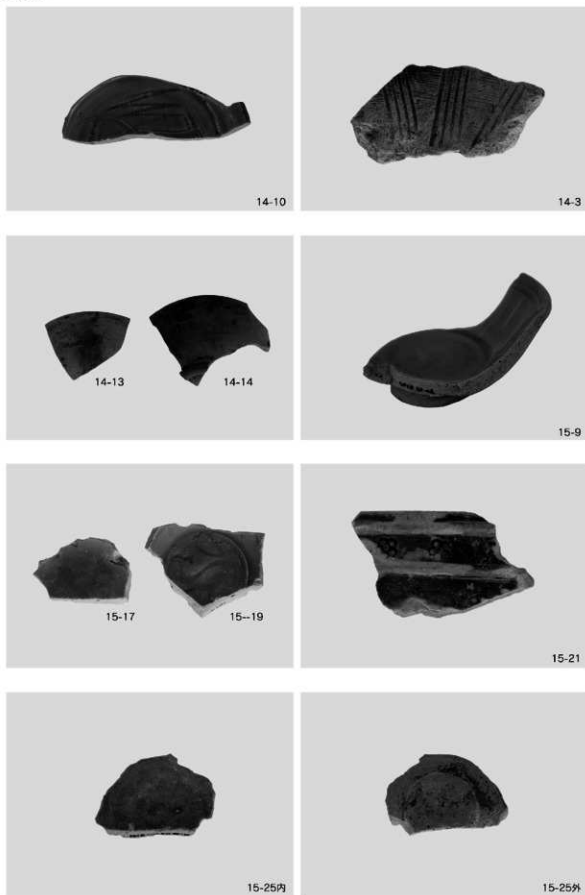


14-11内

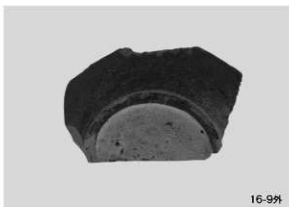
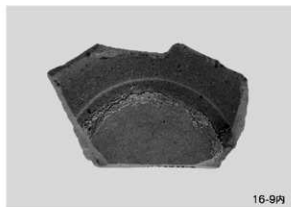
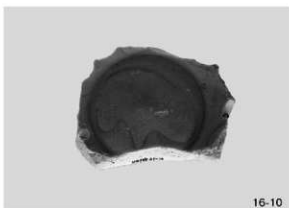


14-11外

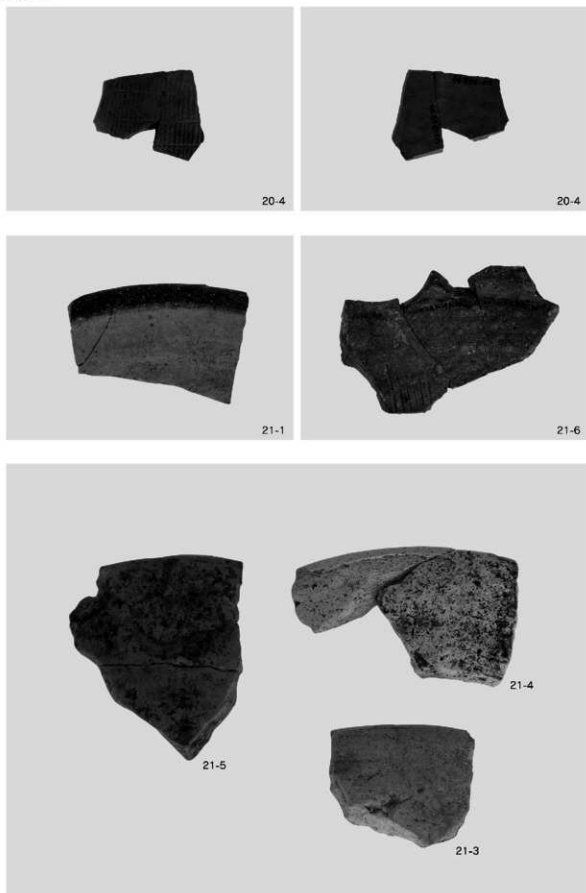
図版8



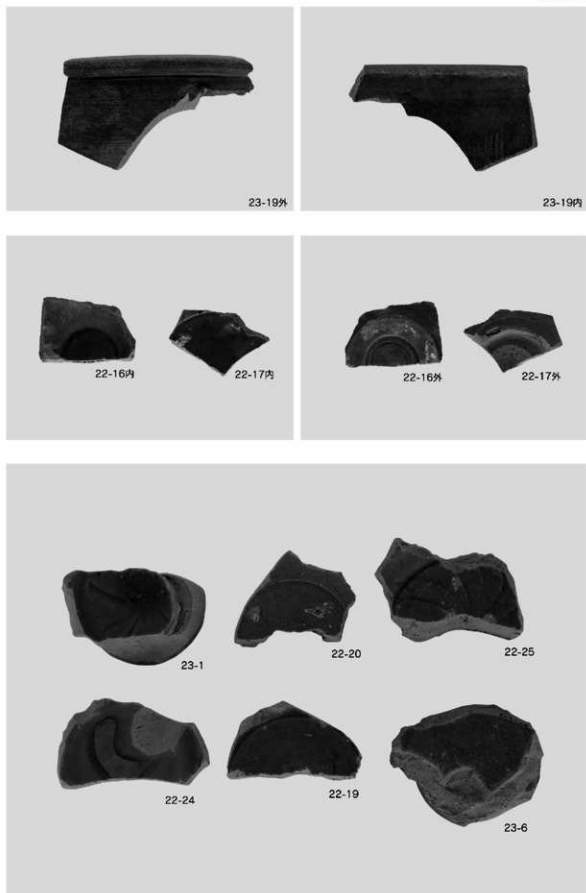
清出土陶磁器・瓦器・瓦質土器



圖版10

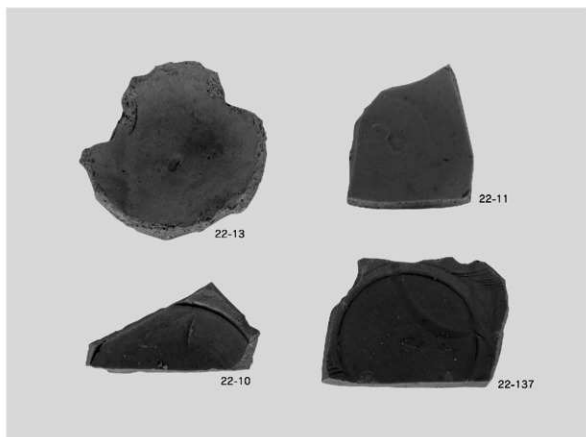
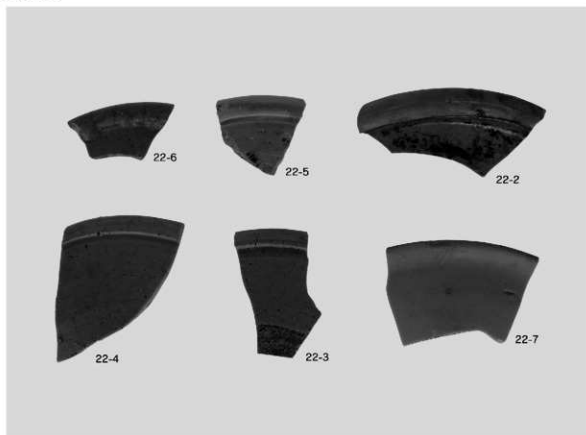


包含層出土・陶質土器・須惠器・土師質土器



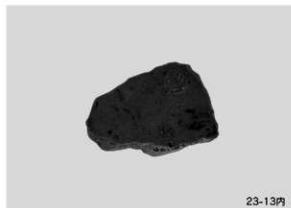
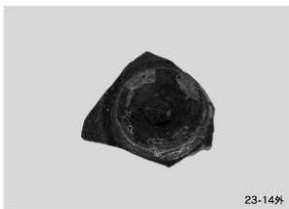
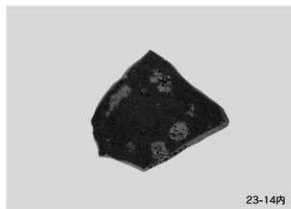
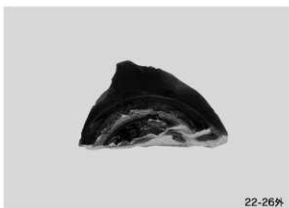
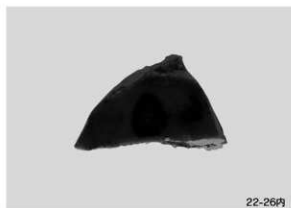
包含層出土陶器・陶磁器

图版12



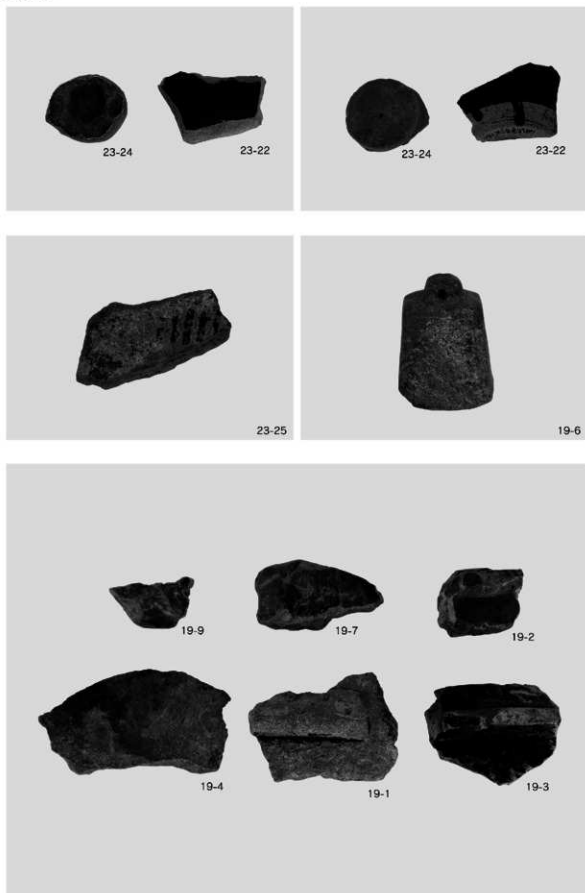
包含層出土陶磁器

図版13

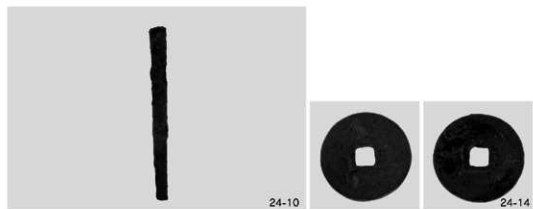
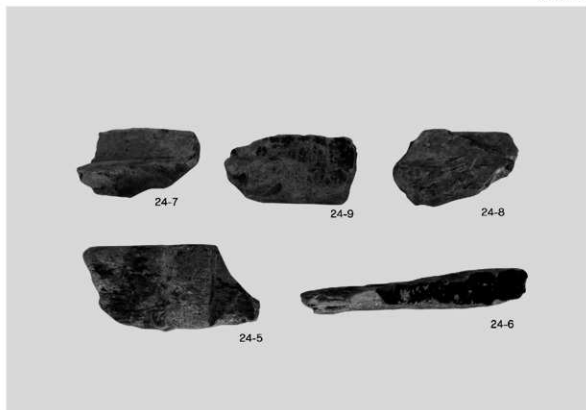


包含層出土陶磁器・朝鮮陶器

图版14



包含層出土陶器・溝出土權・石鍋



報 告 書 抄 録

ふりがな	うるういせきぐん I							
書名	潤遺跡群 I							
副書名	泉道津和崎潤線拡幅に伴う潤丸田遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	糸島市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第4集							
編著者名	平尾和久							
編集機関	糸島市教育委員会							
所在地	〒819-1312 福岡県糸島市志摩初30番地							
発行年月日	西暦2011 (平成23) 年3月31日							
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ツルツルツルツル 潤丸田遺跡	福岡県糸島市 潤	40230		33° 34' 08"	130° 12' 53"	2009.6~ 2010.3	750㎡	泉道拡幅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
潤丸田遺跡	集落	古墳前期 中世	舗装道路、溝、住居、 土坑、ピット	白磁、青磁、象嵌青磁、土 師器、須恵器、黒色土器、 瓦器、瓦質土器、瓦、銭貨 (折二銭)、椀、石鍋		中世の舗装道路		

潤 遺 跡 群 I

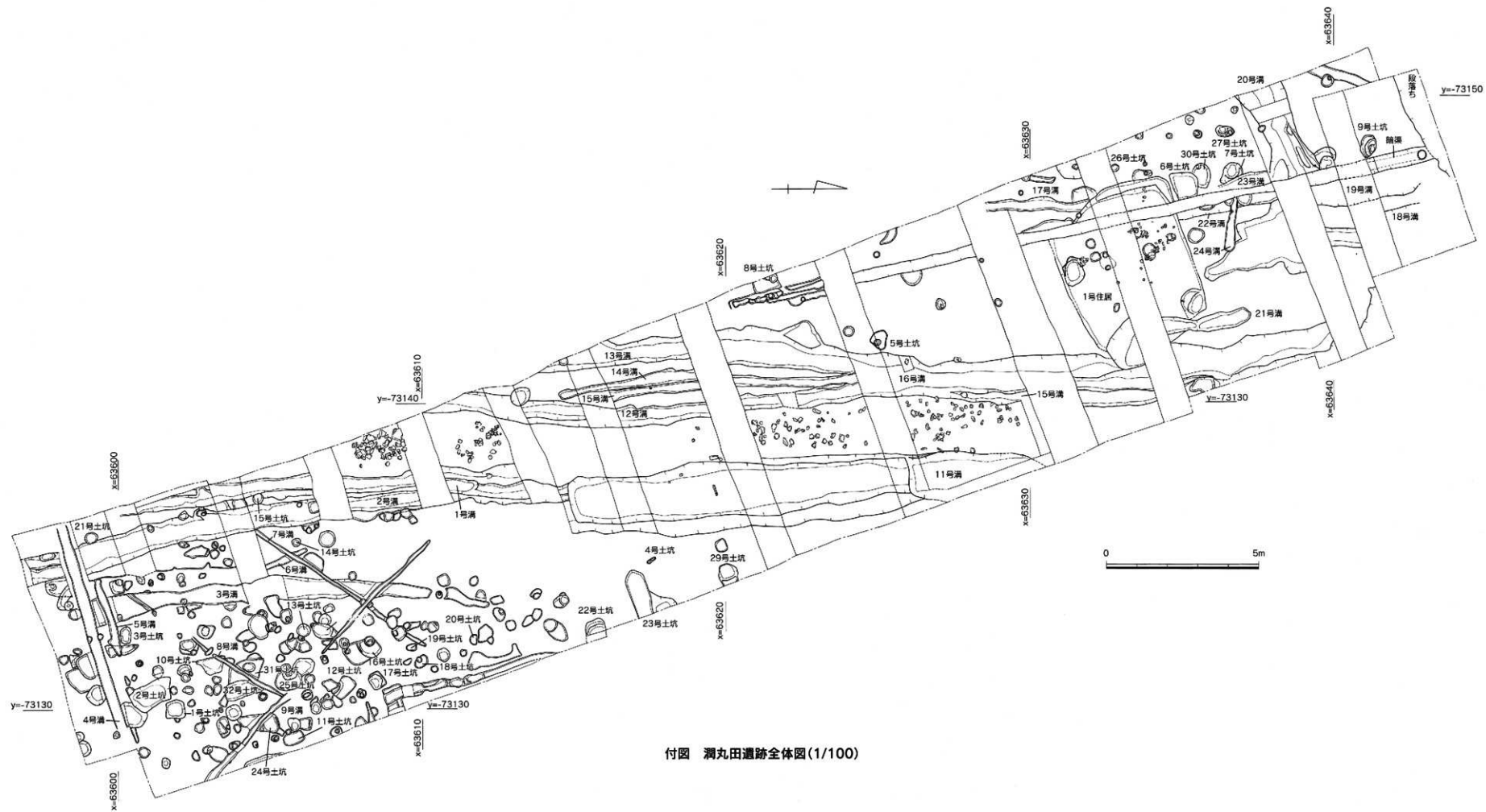
—— 泉道津和崎潤線拡幅に伴う潤丸田遺跡の調査 ——

糸島市文化財調査報告 第4集

2011 (平成23) 年3月31日

発行 糸島市教育委員会
福岡県糸島市志摩初30番地
TEL 092 - 332 - 2093

印刷 ㈱重富印刷
福岡県糸島市前原東三丁目1番8号
TEL 092-322-0191 FAX 092-324-2661



付図 洞丸田遺跡全体図(1/100)